

I S S N 0385-7786

福岡市立歴史資料館

研 究 報 告

第 3 集

1 9 7 9

福 岡

福岡市立歴史資料館藏

福岡市立歴史資料館

研 究 報 告

第 3 集

1 9 7 9

福 岡

序

このたび、福岡市立歴史資料館より研究報告第三集を刊行することになりました。

この論集は、資料館運営の中核、学芸部門の関係者各位による重要な基礎的研究活動の一端を公表するものであります。今後の研究にいつそうの進化をもたらす資料ともなるものであります。

市民各位ならびに研究者各位の御鞭撻と御協力をお願い申し上げます。

昭和54年3月31日

教育長 戸 田 成 一

この研究報告第三集には、当館の史資料研究に関わる二つの論文を収めています。

その一、三島 格氏の「館蔵本『豊前・筑前其他出土考古品図譜』解題」は、当館で昭和48年度に購入した図譜が、明治時代前半から後半にわたって記された、本県考古学界の揺籃期における見のがせない史料の一つであることを調査紹介されたもので、その二、筑紫 豊氏の「福岡藩の国学者青柳種信の研究（三）一沖ノ島防人日記一」は、種信の万葉的素養の豊かさと国学的学殖の非凡さをうかがわしめるさまを実証的に考察されたものです。

今後とも、本報告の内容充実のため館員一同努めてまいりますので、各位のいっそうの御指導と御支援を切にお願い申し上げます。

昭和54年3月31日

館 長 石 橋 博

目 次

館藏本「豊前・筑前其他出土考古図譜」解題……………三 島 格 1

福岡藩の青柳種信の研究(三)——瀧津島防人日記——……………筑 紫 豊 一

館藏本「豊前・筑前其他出土考古品 図譜」解題

三 島 格

1. はしがき

本図譜は、福岡市立歴史資料館が昭和48年度に購入した図書（註1）であるが、その後再見の折を得て、その重要性を改めて知った。それは収録された遺物のすべてが発掘によるものではないにせよ、出土・採集地および当時の所蔵者が明確であり、かつ重要な遺物を含むこと。現在の遺跡地名表に記載されていない地名・遺物がかなり認められ、さらには戦後の調査で著名になった番号（註2）や竹並（註3）などの遺物をも含んでおり、それらは遺跡の研究史上からも重要である。加えて本書の成立年代から推して、わが国のあるいは福岡県の考古学界の掲載期の姿相を、垣間見る資料を含むなどの諸点である。なお、本文の性質上所収遺物の解説は、今回は省略したが、関係文献の一部は目録の註で示し、遺物数点を文末に示した。

2. 法量

横19cm、縦26.6cmの仮縛本である。

3. 紙數・紙質

やや厚手の黄色紙で装丁されているが、表紙の一部は破損。各頁は和紙2枚を貼り合せて一枚とする場合と、別紙をそれに貼布する場合などがある。整理の都合上各紙にナンバーを付し、頁とした結果360頁となった。ただし巻首には若干の欠失紙がある。それは現存第一頁の記載が其三から始まっていることと、欠失部の旧状を少しく遺存することから判明する。描画の多くは毛筆による墨画であるが、それに彩色を施したもの、あるいは鉛筆画や拓影なども、僅かながらある。360頁のすべてに描画・註記があるのではなく、113頁にわたる未記入の空白ページがある。また裏見返しに図示（図13）のような、方形状の朱肉による捺印をした小紙片を貼布する。この印章については後記する。

4. 書名

表紙に横3.5cm、長さ20.5cmの縦長の紙片を貼布し「豊前・筑前其他出土考古品図譜 全一冊」

と墨書きするが、これは原記録者によるものではない。原記録者の手をはなれてからの経緯は不明であるが、資料館へ納入した古書店主による記入貼紙であることは、その衝に当った私が同人より確認しており明らかである。けれども原名を尋ねるに由ない現在にあって、しかも館の公簿上登録された書名もあるので、原記録者の意に反するかもしれないが、これに従う。また全一冊であったかどうか、判断の材料がないので、後補のこの三文字については、本文においては書名としなかった。なお同文の背文字があるが、これも後補である。

5. 目 錄

原書には、もとより目録はないが、使用の便を考えて、別記の項目を立てて目録を作製した。頁数の欠けは前記のごとく未記入空白分である。項目中の記事欄には原書の書き入れを可能な限り収めた。出土地は原地名を使用した。目録中の括弧は三島によるものである。つぎに、目録を作製して気付いたことであるが、本図録は原記録者が折々に筆録した各種の資料を、ある時期に大まかな項目別に分類して、最終的に表丁し、一冊の成書となしたことが、記録年次によって推察される。このことは第9節でもふれる。ただし表丁者が原記録者であるのか、以外の人物であるのかは、確定できない。おそらく前者であろうという印象をうける。

6. 所収遺物および出土地（図1～13、文末付図の頁は目録頁と一致）

所収の遺物は、目録の遺物名欄に示したが、約470点以上を数える。時代的には、縄文・弥生（註10）・古墳時代および以降の歴史時代にわたるが、その中にあって、數的にもっとも多いのは、古墳時代の遺物である。これは明治20年代という学界初期の動向の一つを反映するものともいえようし、反面原記録者がその環境にめぐまれた地域に、居住していたことを示唆する材料になるかもしれない。

所収の遺物は、例外を除き、出土地・採集地が明記されているので、つぎにその頻度を記すが、煩瑣をさけるために、福岡県内分は郡毎に整理し小字名などは省略した。県外および外国は国名のみを記す。

①豊前国			
仲津郡	52	築城郡	1
京都郡	8	宇佐郡	3
企救郡	13	田川郡	12
②豊後国			
大分郡	1	大野郡	1
③筑前国			
遠賀郡	2	志摩郡	1
三笠郡	2	那珂郡	1

怡土郡	2	嘉摩郡	3
鞍手郡	2		
④筑後国			
生葉郡	3	三瀬郡	1
⑤県外および外国			

備前・奥州各國・伊勢・阿波・土佐・讃岐・越後・信濃・飛驒・尾州・大和・山城・武藏
・下野・相模・肥後・琉球・大韓民國・アメリカ・フランス

上記について、注目すべきことは、福岡県内にあっても、圧倒的に多いのは豊前国で、その中でも仲津郡（明治29年に合併して、京都郡となる）が最多で、ついで企救郡（現北九州市）・田川郡・京都郡とつづくことである。このことも先述の原記録者の環境条件と対応するものであるかもしれない。ついで注目すべきは、遺物の収録範囲が九州以外にも及び、北は奥州諸國・南は琉球にいたる、かなり広範囲であることで、時には後章でのべるように中央学者の指導をうけつつ、全国各地の同好の士が相互に情報を交換し、研鑽していたことが察知できる。

7. 中央学界との交渉

本書には、当時すでに東京在住の学者との交流があったと認められる資料がいくつかある。今それを摘要すると、①明治22年（1889）神田春平先生に寄贈（P. 52、註4）。②同21年（1888）東京人類学会に寄付（P. 61）。③同年坪井正五郎理学士（註5）と共に繩文式土器を木月貝塚よりうる（P. 285-86）などの註記がそれである。はしがきにのべたように、本県の考古学史上看過できない史料であろう。

8. 原記録者をめぐる所蔵者群

本節では、福岡県内に限定して収録された所蔵者を、可能な限り郡村別に示す。その意図は二つある。一つは約20人の人士が活躍したのは、約一世紀以前のことであり、現在では孫の方々の時代であろうが、もしやこれらの遺物の一つでも保存されてはいないかという程度の、軽い好奇心から出たもので、いわば筆者の一種のおせっかいでもある。けれども本県考古学界が好古から考古へと転換する振籠期に、県北部を中心にしてこれだけの熱心な収集家がおられたという事実は、驚異であり、後続のわれらは、記録して後世にのこすべきだという、義務感ともいうべき情感が底流として作用したことの事実である。二つには、もっと現実的な目的があるが、その前に所蔵者名を次にかかげる。

仲津郡 鹿島・尾形昌三・守田・松島・柏木・坂井新蔵・古賀仙平・家蔵。

企救郡 佐野怪（常）彦・佐野・（太祖神社）。

田川郡 （香春神社）・（香春警察署）・福島。

遠賀郡 伊藤松延（中間神宮）。

京都郡 岡崎昌平治・鈴木鉄太郎<二名トモ菊田村>。

那珂郡 江藤(志摩郡) 藤野七平。

怡土郡 管(音)六郎<前原村>・江藤正澄。

生葉郡 田代離三<朝田村>。

嘉麻郡 江藤正澄・藤崎理三郎<千手村>。

宇佐郡 <佐田神社>。

上記約20名の人士は、相互に親交があったであろうことは、容易に推察できるが、筆者の不勉強のせいで、早く筑紫豊先生(註6)によって紹介された江藤正澄氏と、同じく同先生の教示によって知り得た尾形昌三氏の業績(註7)を、わずかに知り得る程度である。

ここで二つ目の現実的な問題に入る。それは仲津郡の末尾に家藏なる二文字の署名を遺した人物(※印)についてであり、この人物こそ、本図譜の原記録者である。

家藏とする遺物には、隣接地方のものもあるが、圧倒的に仲津郡出土が多い。第6節でのべた原記録者に対する私の映像は、ここでも対応するが、家藏なる署名を遺した人物は、この段階ではまだ実像とはならない。

9. 成立年代と原著作者

本図譜の成立年代をうかがうに足りる材料は、作者が遺物の傍に註記した年次を手がかりとするほか、現在のところ皆無である。以下年次の明かなもののいくつかを下記に示す。ページは本図譜のページである。

- ① p. 98 明治12年1月27日謹写。
- ③ p. 276 明治16年太宰府參詣途次岡地ニテ獲之。
- ③ p. 260 明治21年5月20日写。
- ④ p. 289 明治21年5月21日香春警察所ニ於テ見ル。
- ⑤ p. 61 明治21年6月東京人類学会ニ寄付。
- ⑥ p. 37 明治21年10月松田賛三郎持寄写之 家藏。
- ⑦ p. 286 明治21年12月鞍手郡下木月村字貝壳畑ニテ理学士坪井正五郎ト共ニ獲ル所ナリ。
- ⑧ p. 72 水町村ニテ22年6月8日獲之 家藏。
- ⑨ p. 71 22年6月25日北方村ニ所獲。
- ⑩ p. 52 明治22年6月神田孝平先生ニ寄贈ス。
- ⑪ p. 40 23年4月9日写。
- ⑫ p. 226 明治23年4月写。
- ⑬ p. 302 明治24年5月24日同所ニテ獲之。
- ⑭ p. 337 明治24年5月 家藏。

- ⑯ p. 271 明治24年11月甚兵衛掘出。
- ⑰ p. 28 25年6月20日。
- ⑱ p. 120 明治26年1月30日加来重信君寄藏。
- ⑲ p. 281 太宰府町明治26年7月。
- ⑳ p. 54 明治27年2月27日模写ス。

年次の明らかなものは、上掲のごとくである。もっとも、著者は描画の度にその年月日を必ずしも記入はしていない（例えばP.3, 9-12, 72-73以下かなりある）点もあるので、そのことを考慮に入れる必要がある。こうした点を勘案しても、おおよその著者の活動期間の一斑が、上掲の年次によって、把握できよう。即ち最初期は、明治12年1月（1879）にさかのぼり、少しく中断し同16年に太宰府に詣で都府楼の軒丸瓦を拾いその拓影を収める。その後中断を見るが同21年以降、22～27年と連続した活動をしている。要約していえば明治12年（1879）ごろから同27年（1894）ごろの約15年間が、本図譜記録者の活躍した時期といえる。

ただ注意すべきは、最古期の明治12年の年次をもつ遺物（和紙の拓影）の紙が、巻頭になく、上掲のごとく98頁に纏められていることであり、すでに第5節でのべたように、ある時期に原記録者が、大まかな項目別にまとめて、成書となしたことが、ここでも推察できる。

10. 印章について（図13・写真1）

第3節で、裏見返しに捺印（朱）をもつ小紙片の貼布があることを述べたが、本節ではその印章についてのべる。

印面の形状は、横3.5cm、縦3.8cmを測るが、さらに約3cm平方の内区をもち、その中に二字二行の四文字を配する（図13・写真1）。文字は「真口寺印」と読んだが、第二字が判読できない。（註8）小田富士雄氏の教示によって、弘津史文氏の報文（註9）にあることが判明した。弘津氏の報文は短文でもあり、同誌自身も入手困難であるのでつぎに紹介する。

「豊前国京都郡豊津園分寺東書院趾より発掘せしものにして、今余の藏するところなり。印面は巾一寸二分長一寸三分二重枠の方形中に「真口寺印」の文字あり。第二の字は亨又は京或は卓かと思はるれども不明。会津恵日寺旧藏印の内天長二年淳和帝の所屬といへるものと似よりたるものなり。」

とのべ、印面および一孔の穿孔をもつ摘み（把手）の部分を写真（写真1、複写）によって紹介し、「豊前国分寺址発掘銅印」なる説明を付している。

つぎに、裏見返しに捺印された鮮明な印影が、上文弘津氏のそれの印影であることは間違いないが、弘津氏の発表は大正4年（1915）であり、上記9節においてのべたごとく、本図譜成立の年代とは、若干のへだたりがある。おそらく、弘津氏の所有に帰するまでのある時期に、本図譜記録者もしくは他の第三者による、印影を収録したのであろう。想像をたくましくすれば、記録者の志向がこの頃から古印に傾斜しかけていたのではと、考えられないでもない。

11. 結語—原記録者の像

以上、所要項目について本図譜の解題を不充分ながらこころみたが、既述のごとく肝心の原記録者については、ついに明確にし得なかった。強いていえば、次のことは言えるのではあるまい。

①豊前国仲津郡か、もしくはその周縁の地に住いされた研究者であろう（6、8節）。

②活動期が明治12年（1879）から同27年（1894）にわたっていることと、書き入れの文字および文章が、若年のそれではないと推されるとから、比較的長生されたとしても、大正末期から昭和初期ごろまでに存命であった方ではあるまい（9節）。

現時点では以上のような曖昧模糊とした像しか、つかみ得なかった。けれども、探索の手がかりは絶無かというと、あながらそうでもない。原記録者をめぐる所蔵者群の節で、約20名の人士をあげたが、それらの遺族の方々にあたって、手がかりを擴むという手段である。今回はそれをなしえなかつたが、やはり各界各位の援助を得て、埋もれた篤学の士の像を明かにすべきだと思う。

謝辞 本文執筆に際し、筑紫豊・三宅酒壺洞・鏡山猛・岡崎敬・森貞次郎・友石孝之・米津三郎・渡辺正氣・小田富士雄・西村剛三・下条信行・白石巖・斎藤豊・北村慶子・金丸弘子先生はじめ福岡市立歴史資料館長石橋博氏以下館員諸氏の御教示と御高配を得た。深謝申し上げる。

- 註1 「福岡市立歴史資料館年報」No.2 1975年 福岡。同書で紹介したり、原記録者を豊前の柏木某氏かとしたが、訂正しておく。
- 註2 渡辺正氣・松岡史「福岡県京都郡番場前方後円墳」日本考古学協会 24回研究発表要旨 1969年。
- 註3 ①「竹並遺跡一福岡県行橋市竹並所在遺跡の調査」竹並遺跡調査会 美夜古文化懇話会 1977年行橋。③三島「鈍輪二塚」福岡市立歴史資料館研究報告1 1977年 福岡。
- 註4 神田孝平 かんだたかひら。天保1—明治31（1830～98）。『日本太古石器考』『人類学雑誌』に報文多數。
- 註5 坪井正五郎 つばいしょうごろう・文久3～大正2（1863～1913）。「日本人類学会」「人類学雑誌」の創設者。開拓期の日本人類学界に貢献。著書多數。
- 註6 筑紫豊編著「秋月が生んだ明治の文化人—江藤正澄の面影」秋月郷土館 1969年 甘木。によって江藤氏のことは知り得る。
- 註7 尾形昌三氏については確かに下記を知り得た。①「京都郡誌」伊東尾四郎編 第4節古墳P.98「郡内における古墳およびその発掘物のことにつきては、行橋町の尾形昌三氏最精し、編者はしばしば同氏を訪い一発掘の実験談を聽くを得たり」③「豊前国美夜古平野の古代文化」（1）P.58 定村貴二著「合本美夜古文化」「菟生後期の青銅製の広鉗が行橋氏金剛丸の尾形一郎氏や行事字出店の福島依氏の土蔵深くに保存されている」（圓点著者—尾形昌三氏と尾形一郎氏は同族であろうか？なお昌三氏は昭和6年69歳で死去された。）上記①③については、友石孝之・筑紫豊先生の教示による。
- 註8 行橋氏在住の友石孝之先生から筑紫豊先生宛の私信によれば、京都・仲津両郡および企救・田川・築上郡内では、該当寺院はないとのことである。

註9 弘津史文「大和古鏡印」「考古学雑誌」6-2 1915年 東京。

註10 下条信行「石戈論」「史蹟」113 九州大学文学部 1976年 福岡。所収のNo. 62・33が本書のP. 52～53のそれである。

註11 『中間市史』上 P.166 1978年 中間。

註12 島田寅次郎「石冢山の古墳」「史蹟名勝天然紀念物調査報告」福岡県 1 1925年 福岡。

註13 小林行雄「古墳時代の研究」青木書店 1961年 東京。

註14 小林「三角縁神獣鏡の研究—形式分類論—」「京都大学文学部紀要」13 1971年 京都。

註15 小川敬養「豊前小倉近傍ノ石劍」「東京人類学会雑誌」96 1894年 東京。

註16 山崎有信「豊前人物誌」文学 小川敬養の項 1939年。

<追記>

1. 第8節において、所収遺物の焼拂なる遺存を期待したが、図版3の有柄石劍が遺存し、註11書に収録。
2. 原記載者かと要われる人士について。1人は築上郡太平村出身の吉村鉄臣氏で他は小川敬養氏である。前者については説得までに調査ができなかった。小川氏は本書頁52～53所収の「明治22年6月神田孝平先生ニ寄贈ス」および「以上三種家藏」の書き入れがある石戈3本の内最左端を「一筑前国駿手郡富村大字駿光ノ土中ヨリ発見ス明治22年11月余ノ所蔵トナル」(印三島)とのべ、当該石斧を図示(註15)する。同年であるが月日が合わない。ことに小川氏は豊前地方の出土遺物を、同年代頃の同誌によく報告した人であるが、吉村氏を含めて、いまだ決定しがたい。前者については渡辺正氣氏、後者は下条信行氏の示唆。
3. 前出小川氏は豊前小倉の出身であることが『豊前人物誌』(註16)によって判明した。「代言人として一画をよくすー(以下略三島)」と。やはり追跡すべき人物である。問氏については在福岡法務省諸機関・国会図書館・福岡市民図書館・東京大学人類学研究室・福岡・小倉弁護士会などの御厚配を得た。

5. 目録 (註 括弧内は三島の補記。付図の頁は目録の頁と一致)

頁	遺物名	出土地	所蔵者	記事
1	甲(短甲) 2			其三(短甲)
3	甲(短甲) 1	仲津郡花 熊村	家 藏	其四(短甲) 図版10右
4	青 1			古印青(『桂園漫錄』所取の短甲を抜書。 以下同)
5	青 1			同 上(短甲)
6	青 1			同 上(短甲)
7	青 1			同 上(短甲)
9	轡 1	同郡木山村	家 藏	
10	轡 1	同郡木山村	同 上	
11	轡 1	仲津郡花 熊村	同 上	
12	轡 1	同 上	同 上	
13	轡 2	上糸州 下前浦		奥州白石大村土中所得 爾前兒島八幡宮
14	轡 1	伊 势		伊勢内宮冠木鳥井辺福池所得惣体鉄を銀にて包む
16	轡 1			「寧楽轡」
18~19	上(金刷製版) 1 表 下 同 上 裏	鹿嶼郡仲津 郡天生田村		鹿嶼郡仲津天生田村共に山字大村等古墳 中所獲 多形柄頭多シ地頭其表轡キ端ニ横 様ヲ打出シ絲絞金ラヌ模様及ヒ金物圓ノ 如シ 長さ一尺八寸(其一) 図版1 (其二)長中程ノ才、四寸五分五厘金物アリ 略ス 内側ニナル鉗左右トモ此間金物ナシ (部分ノ寸法ヲボス) 図版2
20~21	同 上 2 表 同 上 2 側面			
22	銅 鐵 3	田川郡番 春村	香春神社	田川郡番春村香春神社藏
23	銅鐵など 12	阿波その 他の	神 田 氏	阿波出土 8 不詳 4
25	鍔、鍔軸(みづお) 1	仲津郡花 熊村古墳	家 藏	実測二分ノ一
26	鍔 1	京都郡均 田村	同地昌平 治、鈴元 鉄太郎	豊前國京都郡均田村大字尾倉邑字八郎塚 伝旗西八郎為朝駕 三月十二日村祭アリ 其塚ノ中 鍔 鉄ノ棒長四尺位 大力長四 尺余 棒四寸位 阿村同崎昌平治 同村鈴 元鉄太郎(朱書)
27				
28~29	鐵 輪 鍔 1	怡士郡本 村字牛畠	管(菅)六郎 管(菅)六郎	筑前國志摩郡原原村官六郎ノ藏 福岡津田 信秀氏所蔵 二十五年六月二十日 怡士郡本 村字牛畠古塚ヨリ掘出ス 本因ハ突物ト同 寸ニ描キシモノナリ
30~31	鍔 1	福島県石 川郡	羽柴雄輔	福島県石川郡小山田村駆穴中所出之古鍔
32	鍔 1	出所不詳	松島氏藏	
33	上、鉄具 1 中、亞鍔 1 下、鍔 1		法隆寺など	上、和州法隆寺上官太子鉄具 中、正倉院 御物院殿 下、慈沙院鍔 軍器考
34	上、石馬 1、左(?) 1 下、瓦馬 1	筑後國生 葉郡	武 藏など	上、石馬筑後国生葉郡一条村 左、和州法 隆寺所蔵 下、武藏國埼玉郡上中条村発見
35	石 馬 2	筑後國生 葉郡		石馬二個 筑後国生葉郡福島城址
36	銅劍(戈) 1		柏木氏藏	二分一 図版4

頁	遺物名	出土地	所蔵者	記事
37	同上(戈)右1,左1	仲穂郡 同郡天生 田村	家藏	山名氏所遺 実測二分一 同郡天生田村横穴発見 明治二一年十月松田賢三郎特參写之二分一 國版4
38	同上(戈)右1,中1,左1	—	—	右 下野足利駿河守開山御所持七首劍兩重國神作刃ノ全面長四寸幅中央四分中、輪(以下略) 左、鐵劍 シンガボール博物館(以下略)
39	精銅鉗右1,左1	田川郡糸 田村	—	右 木製P.38左ノ木製柄 左、銅鉗十二箇 明治三年田川郡糸田村土中発見
40~41	(鋼戈拓影)2	—	柏木(挿入 分不明)	(鋼戈一よりの拓影を示す。さらに別の拓影を同頁にはさむ。前書きには二年三四月九日写とあり。挿入分出土地、所蔵者不明。)
44~45	両刀劍1	豊津村彦 根塚穴	豊津 鹿島氏藏	豊津村大字彦根横穴 穹長二尺五寸六分(以下略)
46~47	(鐵劍)上1 (同上)下1	豊前国仲 津郡	家藏	上 豊前国仲津郡豊津村大字彦根横穴(傍ニ木山横穴ト記アリ)下、花旗冢穴 穹長一尺八寸二分
48~49	劍2	不詳	松島氏藏	出所不詳(拓影)
50	(刀装各種)5	花旗村古 墳	尾形	—
51	(刀装各種)9	天生田村 古墳	守田	—
52~53	石劍(石戈)3	—	家藏	内一標明治二年六月神田孝平先生ニ寄贈 註10.
53	石劍(石戈)1	德力村	佐野怪彦	豊前国企救郡石田村字明神土中発見 註 10. 企救郡德力村佐野怪彦藏
54~55	(有柄石劍)1	造賀郡中 間停 車場(中間停 車場)	伊藤松延	右遠賀郡長津村中間神宮伊藤松延氏所藏石 劍頭面及正面夷大國 漢風色ニ青色及淡 色ノ斑文アリ質滑沢、 中間字御帽(中間 停車場近傍)ノ蓋中ヨリ掘出セリ、 因ニ此 御帽ナル名ハ否明天皇西園巡狩ノ際ニ莊 属セラレタルヲ以て名ケタルベシ故ニ右石 劍モ其当時ノ遺物ナラン 明治二七年二月 二七日撮写ス 二七年三月十日黒崎高等小 学校教員二村鹿吉氏寄贈 中間村大八木某 二男、(全長9寸8分5厘)國版3 註11.
56~57	石劍1 同上1	仲津郡豊津 村台ヶ原 2317番地 越後妙高 山下	松島 玉江	仲津郡豊津村字台ヶ原二—七番地内ヨリ 出入ススルニ元占墳ノ有リ申地ナラン、 石 質或石ノ如クシテ堅シ色風色ニシテ青色ヲ 帶比石及色共石器ニ多シ、 國版4 天保丑甲午春獲之於越後妙高山下 雲翠院 主者玉江氏藏
58	同上2	那珂郡 韓國	江藤 宮本藏官	筑前国那珂郡片瀬村 人類学会叢書第6冊 朝鮮慶尚道慶州半月城内(以下略) 同上 10号
59	須恵器 石鏡26	富野字大 久保	家藏	石鏡一富野字大久保外各地、内二個ハシ一 ボルト「古物脱影」ヨリ転写、須恵器拓影 豊前国仲津郡花熊村王中所藏 同國同郡木 山村土中所発見
60	石包丁2	花熊村 木山村	家藏	上 仲津郡阿所土中所藏 明治21年6月東 京人類学会ニ寄付 下 同郡木山村土中発 見
61	同上2	木山村	家藏	筑前国嘉麻郡千手村土中発見4個ノ1 第 後國生葉郡大石村土中発見 生葉郡朝田村 田代稚三藏
62	同上2	嘉麻郡 生葉郡	家藏 田代稚三	大和國サミタヨリ発見。攝津住吉郡平野多 治見治兵衛所藏 篠崎国佐久部ヨリ発見。 同國松本、松林清太郎所藏、羽後國南辺郡 御所野発見、同國南秋田郡鶴山村大友道恒 ノ藏
63	同上3	大和、信 濃、羽後	多治見、 松林、大 友ラ	—
64	同上2	嘉麻郡	江藤 正道 藤崎理三郎	筑前国嘉麻郡千手村発見スレート(2箇ト モ) 千手村藤崎理三郎藏

頁	遺物名	出土地	所蔵者	記事
65	石包丁 3	嘉義郡 大和 アメリカ	藤崎、水 茎	右頁64ニ同ジ 左上、大和國松原京都北野 平野神社赤宜水某館藏 左下北米ウナラ スカ島 東京人類学会叢書掲載
66	同上 3	アメリカ		(北米各地)
67	同上 2	アメリカ 日本		(北米、左三ハ雲根志第三所載分)
68	石鎚 2 石包丁 1 石劍 1	豊津村、 天田村		石鎚 豊津村字山ノ神元屋分村ノ内、同村 字孤原 石包丁 天田村横穴、石劍 豊津 村字台ヶ原
69	石斧 2	豊津村		上、豊津村用達所ノ前 下、同村固作分
70	鶴文式土器 2			
71	石斧 4	企教郡北方 村城野村		2個 二二年六月二五日北方村ニ所獲企教 郡ニテ石斧ツクルコレヲ呉矢トス 二個同 年六月八日城野村四十家ニテ拾得
72	石斧 2	水町村	家 藏	上、水町村ニテ二二年六月八日獲之 下、 城野村四十家ニテ二二年六月八日
73	石斧 1	田川郡	家 藏	田川郡夏吉村字孤原 (右四個家藏トアリ P.73, 72, 71下ラサスカ数不合)
74	石斧 1	鞍手郡		筑前鞍手郡下月村貝塚
75	石斧 2 土器 2	肥後國八代郡 加来熊次郎		肥後國八代郡吉野村貝塚石器及陶器破片 加来熊次郎所有同氏拾得
76	石斧 1	仲津郡	松 島	豊前國仲津郡豊津村小字フキ谷桑園園製地 ニ出土、此地旧時同郷花輪村ニ同スル所址、 (形、石質、色、寸尺ヲモ記ス)
	石斧 2	豊津村		右、豊津村字孤原 左、豊津村富貴谷
77	同上 3	篠崎郡 企教郡	家 藏	上右、篠崎郡角田村発見 上左、企教郡北 方村発見 下、企教郡北方村発見
78	同上 4	企教郡	家 藏	右・右下・左下、企教郡城野村字四十家 左、同郷水町村字高坊
80	(三角縁神獸鏡) 1		宇原神社	(拓影) (石冢山古墳、吾作銘西神四獸、広 島・大阪・京都の古墳と同范鏡あり) 図版 8, 12, 13, 14.
81	(三角縁神獸鏡) 1		自 慈 堂	(拓影) 図版 6
82	(変形四神鏡?) 1 (無縁式四葉鏡) 1		自 慎 堂	(拓影) 図版 7
83	(模文帶尚方作銘細 縫式銀帶鏡) 1		柏 木	(拓影、後漢代前半) 図版 7
84	(高麗鏡?) 2		家 藏	(拓影、下 六獸鏡)
85	湖州鏡 9 (P.93マデ)	企教郡	太祖神社 (御祖)	古鏡 9面 企教郡足立村太祖神社蔵、寛政 七年四月十日同社境内土中所獲(以下九 面拓影 P.93マデ)。小倉北区
86	同上		同上	(同上二面)
87	同上		同上	6 湖州真石家上等昭子記
88	同上		同上	呈立妙見大寺御宝前 右者為在原郡市目病 酒除頭鏡空臺也口女市子字佐氏口生也 □□□ 宣安三年二月敬白
89	同上		同上	
90	同上		同上	
91	同上		同上	
92	同上		同上	湖州偏頭橫酒樓相對石念二叔男念七郎鏡
93	同上		同上	明治二三年十月二九日写

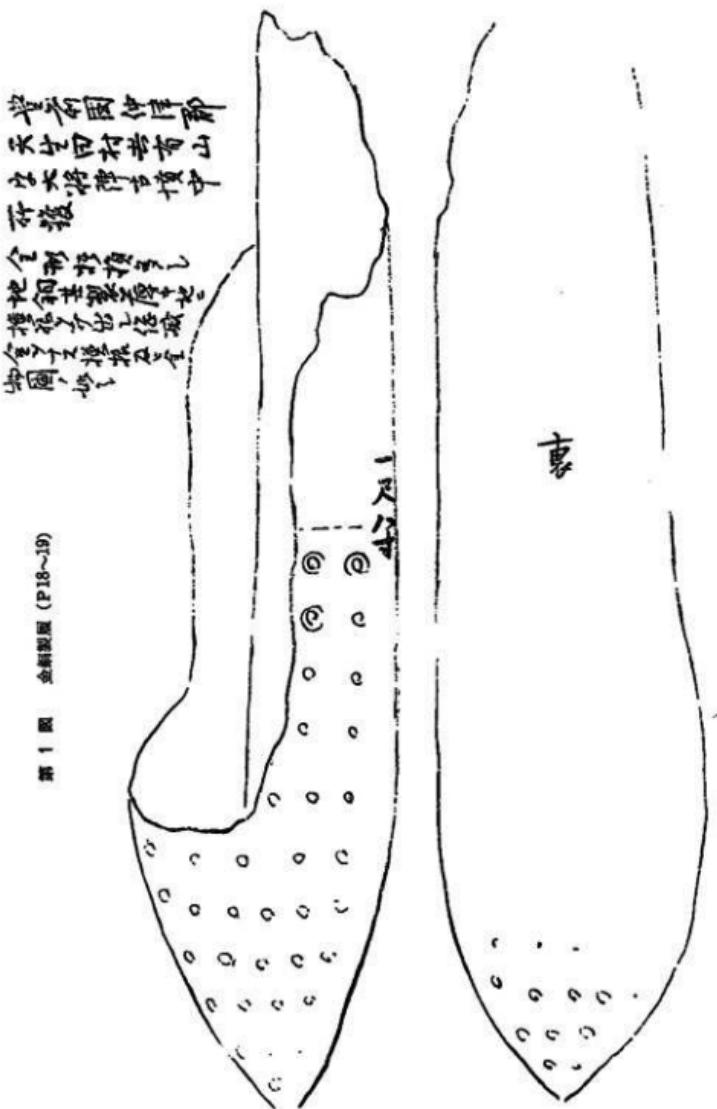
頁	遺物名	出土地	所藏者	記事
97	(和鏡?) 2		家藏	下、家藏
98	(和鏡) 1	企教郡		安藤帝御物ノ由宮伝 企教郡題表其寺藏 明治十二年十二月二七日謹写(拓影)
99	同上 1		家藏	
101	(三輪玉) 3		家藏	右1、何物ナリヤ知ルヘカラス仲津郡木山 村古墳中數多之レラ出タス家藏(左2、日本石器考所載) 国版10左
103	(紡錘車) 2	仲津郡	家藏	上、豊前国仲津郡花旗村馬岳古墳 下、同 國郡豐津
104	(同上) 4			「日本石器考」所載
105	石碑(板碑) 1	企教郡		企教郡水町村字高坊ニアリ土谷升家ト云 永二癸未年ヨリ明治二年迄五四八年幅一 尺六寸五分(庚水二年) 国版12
106~110	(由来・伝説文)			(同上ノ由來オヨビ伝説ヲ記ス)
111	同上 2	武藏國 荒泉寺	荒泉寺、 荒泉寺	武藏國荒泉寺小豆沢村荒福寺墓地 同國同 郡浅草橋場荒泉寺境内
112	同上 1	武藏國	浅草寺	
113	同上 5	武藏國		
114	同上 2	武藏國		武藏
115	同上 3			御宇多帝御宇符單惟康賴王以下三碑
116	同上 4			御柏原帝御宇符單足利義種以下四碑
117	(板碑、石塔) 3			龜山帝御宇符單宗兼親王以下二 範賴石塔
119~120	(板碑) 1	宇佐郡	佐田神社	宇佐郡佐田村佐田神社境内ニアリ祭神武内 宮跡 二六年一月三十日加來重信君寄贈 (元弘三年)
121~122	埴輪破片 2	企教郡		豊前國企教郡曾根村字中曾根荒神山古墳旁 見遺物破片
127~128	土偶 1	陸奥國 龜岡	野呂武左 衛門	陸奥國西津軽郡飯岡村龜野呂武左衛門蔵
129~130	同上 1			陸奥弘前佐藤源原園 羽前復岡羽柴埴輪再 現
131~132	(飾瓦?) 6	陸奥國中 津輕郡	山谷蘿四郎	高杉村岩木山の東麓 同人云先年椎下ヨリ 得ルト云此物最古物ニシテ其材ハ瓦ト見 ユル也 黒色ニシテ葉波白也
133~134	土偶 2	陸奥國 龜岡	佐藤 蔦	土中所出ノ土偶写 序ニ云龜ヶ岡ノ龜八頭 字が正字ナリ原形色茶光沢アリ 原形色ハ ダ黒シ
135~136	同上 2	同上	同上	西津軽郡龜ヶ岡土中所出ノ人形破片 色黑 タ光沢アリ
137~138	同上 2	同上	野呂忠吉	土性精細全体黑色
139	龜岡式土器 1	陸奥	松森又次郎	
140	土偶 1	羽前國東 田川郡	淡嶺先生	羽前國東田川郡清川村
141~150	(石器各種) 9	下野國	鎌 伊	九点 石棒 独钻石ナド
231	(鉄矛) 1	仲津郡木 山		目釘残レリ
232	同上 1	同上		
233	鐵 銛 2	京都郡興 原村		京都郡興原村番家(註2)
234	同上 2	同上		

頁	遺物名	出土地	所蔵者	記事
235	(鉄鋸) 6	尾州神戸村		「集古十種」所載尾州神戸村
236	同上 3			正倉院御宝物御錦「草器考」
239~240	鉄鋸 10 2	仲津郡花熊村ナド		十点八仲津郡田川郡花熊村古墳中発見 二点八上毛郡麻原古墳
241~242	(組合式箱式石棺?)	京都郡		京都郡入学村字見立塚内乙 塚内地ヲ掘テ出ル始ナリ(底石ナク土床太刀陶器等アリ蓋石4枚)
243~244	和鏡 1			慶長十七年大願主細川越中守源朝忠興
245~246	同上(裏面)		(守田氏?)	守田氏
247	石鏡 2	飛州		小川君之惠送
249~250	史前器(加曾利式土器) 1	神奈川県		史前器、「東京人類学会雑誌」第4卷第34号113頁 神奈川県武藏国北多摩郡蕨敷村字台土中発見
251	鉢 4	仲津郡	家 蔵	仲津郡中古墳発見 図版5
252	同上 6	下野国		下野国足利有志町公園内古墳
253~256	斧(鉄斧) 4	仲津郡		
259	斧(鉄斧) 2	三浦郡		筑後三浦郡宮本村古墳 筑後古冢遺物図久留米矢野一貞、村上量般著
260	鉢 3	田川郡		田川郡香春神社 二一年五月二十号
261	(石鼓拓影) 1			
262	(貝製腕輪) 1	仲津郡		仲津郡竹並村古墳 貝器五個内二個東京人類学会ニ寄附(註3参照ゴウラ製) 図版9
263	(同上) 3	仲津郡		仲津郡天生田村横穴(註3参考、イモガイ製)
264	(同上) 1	シンガボール博物館		シンガボール博物館マレー人類衣服品陳列所ボービー島土人ノ用ヒル腕輪(註3)
265	石鏡 4 曲玉 2	フランスなど		(石鏡ハフランスなど出土曲玉ハ翡翠、鏡内空出土地不明)
266	(五鉢鏡) 1		(守田氏?)	二三年四月守田
267~269	鉢 2	仲津郡		仲津郡天生田村字大将陣古墳
270	鉢 5	企教部 仲津郡	佐 家 野 閨	企教部石田村農家所伝 仲津郡所出不詳 同郡花熊村古墳三
271~272	(不明銅器) 4	城野村		城野村大字稻窪 賀劍ノ如シ4個ニテ景目五八斤中西基兵衛屋敷床ノ下三寸余ノ土中ヨリ出土 二四年十一月二日基兵衛屋敷出
273~274	法華寺鐘楼ノ瓦 1 その他	法華寺		(拓影軒丸) 其ノ外金沢文庫、東大寺瓦ノ拓影各1)
275	瓦 拓影 1			(拓影軒丸)
276	都府樓瓦 1	都府樓		(拓影軒丸) 明治十六年太宰府參詣途次同地ニテ獲之
277	國分寺古瓦 1		松 島	(拓影軒丸)
278	弥勒寺古瓦 1	弥勒寺		(拓影軒丸)
279	國分寺古瓦 1	仲津郡	家 蔵	(拓影軒丸) 仲津郡國分寺古瓦
281~282	(平瓦) 1	都府樓	家 蔵	(拓影平瓦) 太宰府町明治二六年七月、手造重三郎二六年七月二日見ル古瓦
285~286	(繩文式土器 2、猪牙 3)	鞍手郡下木村		右八明治二年十二月五日鞍手郡下木村字員亮烟ニテ理學士坪井正五郎ト共ニ埋ル所ナリ

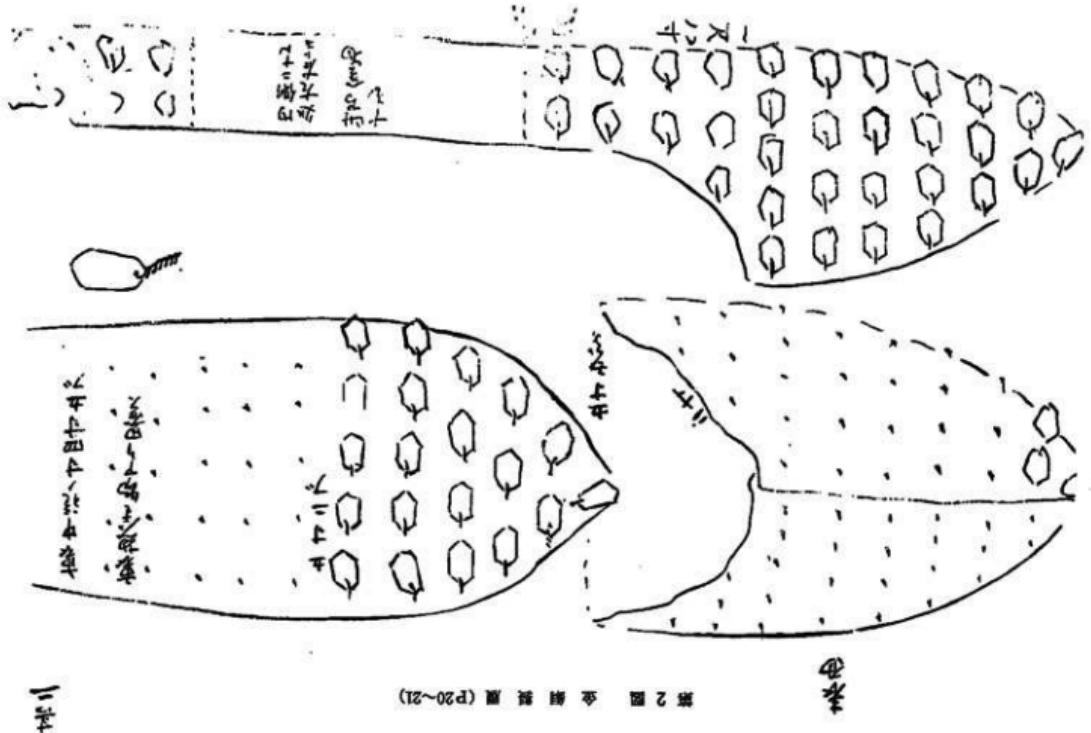
頁	遺物名	出土地	所蔵者	記事
289	(銅製壺) 1	田川郡伊方村	否春警察署	田川郡伊方村土中所出。明治二一年五月二一日否春警察ニ於テ見ル。銅ニ鍍金シタルモノナリ。
292	(須恵器各種) 1	仲津郡木山村	柏木	
293	(同上) 1	仲津郡花熊村	家藏	仲津郡花熊村塚穴
294	(同上) 2	仲津郡	同上	同郡天生田村、木山村
295	(同上) 2	(仲津郡)	?	
296	(同上) 4	同上	?	
297	(同上) 3	木山村な	?	木山村塚穴 城野村字シゲスミ塚穴 花熊村
298	(同上) 3	仲津郡天生田	?	仲津郡天生田横穴 大和 出所不詳
299	(同上) 3	同上	柏木	木山天生田横穴
300	(同上) 4		柏木	質赤
302	(同上) 4	仲津郡、京都郡、企教郡		仲津郡、京都郡、企教郡藍島塚穴 明治二四年五月二十四日同処ニテ獲之
303	(同上) 5			
304	(同上) 2			
306	(同上) 2			
307	(同上) 3	仲津郡豊津		仲津郡豊津
308	(同上) 2			
309	(同上) 2			
310	(同上) 2			
312	(同上) 1	田川郡		田川郡夏吉村字糸飛
313	(同上) 1	田川郡		同上 横穴
314	(同上) 2	京都郡、企教郡		京都郡 企教郡城野村字シゲズミ古墳
315	(同上) 1	田川郡		田川郡夏吉村字萩原横穴
316	(同上) 1	京都郡	松島	京都郡谷口村塚穴
317	(不明拓影) 1			
318	(須恵器各種) 2	京都郡	家藏	京都郡谷口村
319	(同上) 1	田川郡	同上	田川郡夏吉村字糸飛
320	(同上) 2		古賀仙平家藏	
321	(同上) 1		家藏	
322	(同上) 1			
323	(同上) 1	天生田村		出所天生田大機村板
324	(同上) 1		家藏	出所不詳

頁	遺物名	出土地	所藏者	記事
325	(須恵器各種) 1	天生田村	柏木	
326	(同上) 1			
327	(同上) 1		柏木	
328	(同上) 1	天生田村	同上	天生田村横穴
329	(須恵器拓影) 1			(拓影)
330	(同上) 1		家藏	
331	(同上) 1	天生田村	柏木	天生田村横穴 小豆色葉
332	(同上) 1	田川郡	家藏	田川郡上伊田村古墳
333	(圓文式土器) 1	岩代	大塚又兵	岩代桑野 大塚又兵所藏並原古香再因
334	(須恵器各種) 1	天生田村	坂井新蔵 古賀仙平	天生田村横穴 表布目裏圓文
335	(同上) 2		柏木	質赤
336	(同上) 3		尾形、柏木	仲津郡彦藤村横穴、大橋村尾形氏、柏木氏 藏
337	(同上) 3	天生田村	家藏	天生田横穴 土質赤 明治二四年五月
338	(同上) 3	菱塙丸村、 天生田		菱塙丸村 天生田横穴
339	(同上) 1			
340	(同上) 4	天生田村 伊勢、備前		天生田村横穴 備前 势州桑名郡坂塙村
341	(同上) 2	山城	田口	山城國木橋山所掘得、「梅園奇賞」所載
342	(同上) 4	肥後、蒙 岐、土佐		諸侯國山田郡上田井村、由良古堺 肥後國 山本郡内村横穴 土佐國長岡郡南部塙穴
343	(土器) 5	筑前、伊 勢、豐州	江藤正澄	筑前吉土郡三床村 伊勢桑名郡坂塙村 豊 州鶴岡村近在
344	(須恵器各種) 3	田川郡、仲 津郡ナド		田川郡宮尾村横穴、企板横代村塙穴 仲津 郡羽根木村字古編鍛
345	(同上) 2	志摩郡、 怡士郡	磯野七平 江藤正澄	筑前國志摩郡某村古墳 同國怡士郡東村古 墳圖版11。
346	(同上) 1	土佐		土佐國長岡郡南部塙穴 中央直径六寸深五 寸
347	(土器) 4	豊後大分 郡		豊後國大分郡富岡村富岡川 右4箇土器友 人某奇贈
348	(土器・曲玉・石匕) 8	豊後大野 郡、琉球		大野郡長畠村大字小切烟烟中ヨリ出ル西伏 某採集(ノノ他同郡中井田村ナド、曲玉ニ 沖鷹ノモノアリ、紙片貼布)
350	(須恵器各種) 11	伊勢、相 模、下野		野州宇都宮神社ノ後ヨリ掘出ス 9箇駿州 韓國近在 伊勢桑名郡坂塙村
351	(同上) 3		柏木	土質赤
352	(同上) 6	下野、朝 鮮		下野国足利有志町公園古墳、朝鮮出
353	(同上) 2	朝鮮	宮本	朝鮮廢尚道慶州半月城内羅朝宗廟城 宮本 謹官所藏
354~358	(同上) 15	下野、仲 津郡	家藏	家藏(14箇八下野國那須郡 1箇八仲津郡 彦藤村)
359	(同上) 2	仲津郡	尾形、家藏	(内1八家藏) 仲津郡花輪村塙穴大樹村尾 形氏藏

頁	遺 物 品	出土地	所藏者	記 事
360	(環頭・雲珠・曲玉) 4	仲津郡、 田川郡	福島、 尾形昌三	環頭 田川郡彦根横穴出土福島藏。曲玉 仲津郡大村本郷東穴尾形昌三蔵内 1個天生 庭田、雲珠 田川郡金川村字平塚古墳道孝 次ヨリ春曉 図版5
裏見返	(古印影) 1	?		(奥口寺印、註9参照) 図版13、写真1

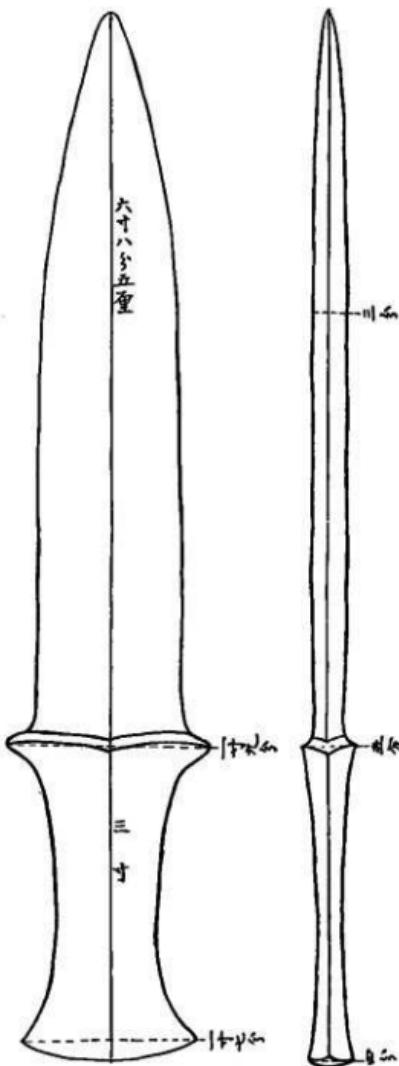


第1回 金網糸屋（P18~19）

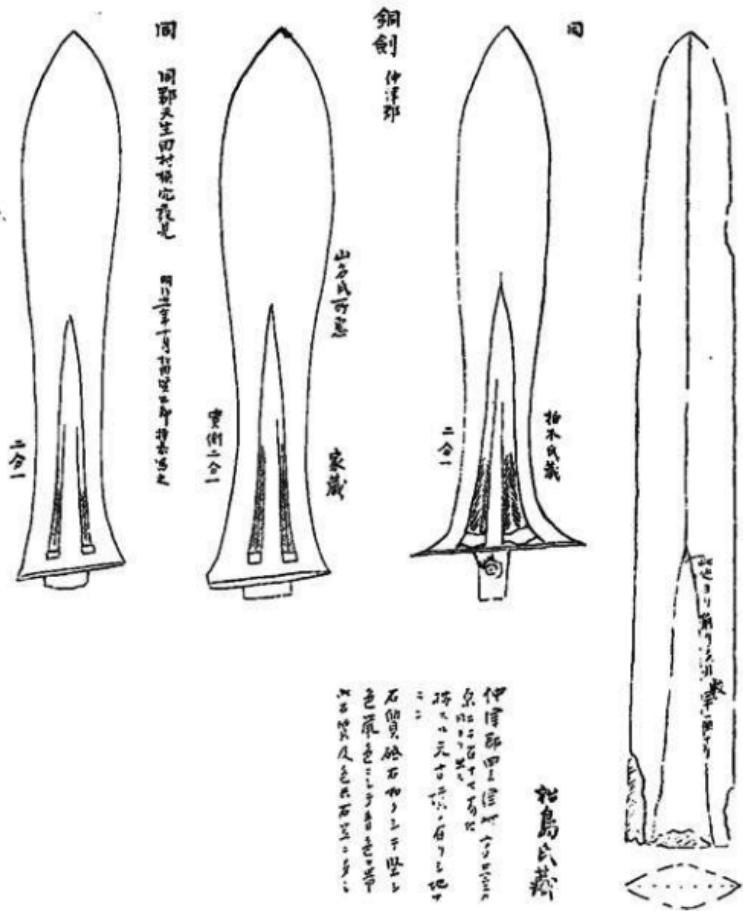


右遠賀郡長津村中間神官伊藤松延氏所藏石劍側面及正面實大圖
 淡鼠色ニ黒色及淡卯色，斑紋アリ質滑澤
 中間字御橋（中間停車場近傍）溝中ヨリ堀出セリ
内記ス
 御橋之名ハ齊明天皇西國巡狩際駐蹕セラシタルタツメ各ケタル
シ故ニ右石劍ミ其當時遺物ラン
 明治廿七年二月廿七日模寫ス

廿七年三月一日
 黒崎高等小學校教員
 二林鹿吉白山齋贈
中間御橋不甚清



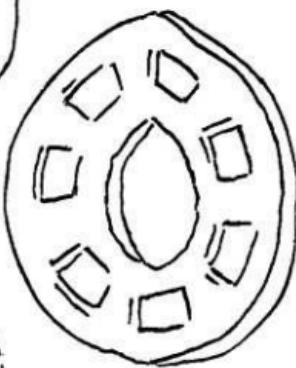
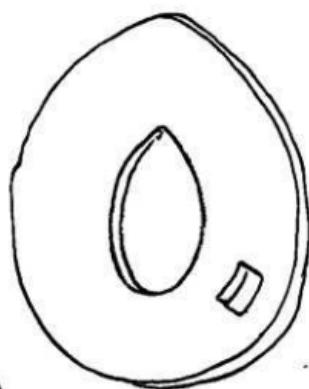
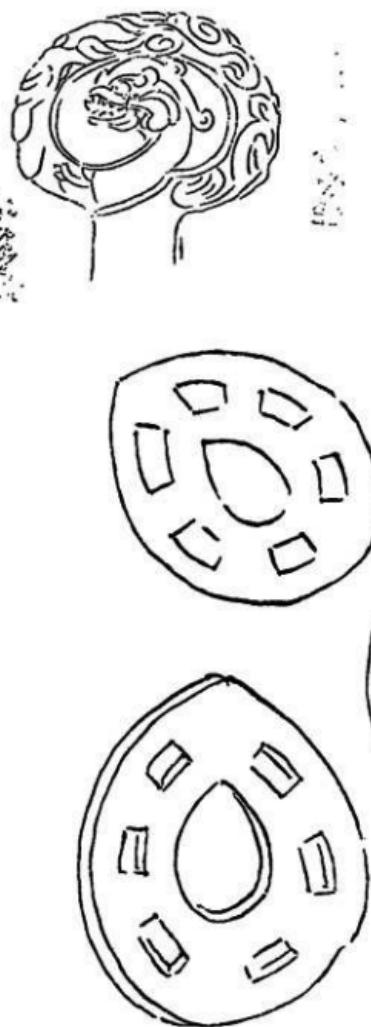
第3圖 有柄石劍 (P54, 55)



第4圖 左 鋒戈 (P36, 37) 右 石劍 (P56, 57)

鈕
伊澤郡中古博覧見

家藏



第 5 図 銀 (P251) 深頭 (P360)



第6圖 三角綠神獸鏡 (P81)

第 7 圖
左：漢雲龍尚方作新故式狀帶鏡 (P83)
右下：變形四神鏡 (P82)

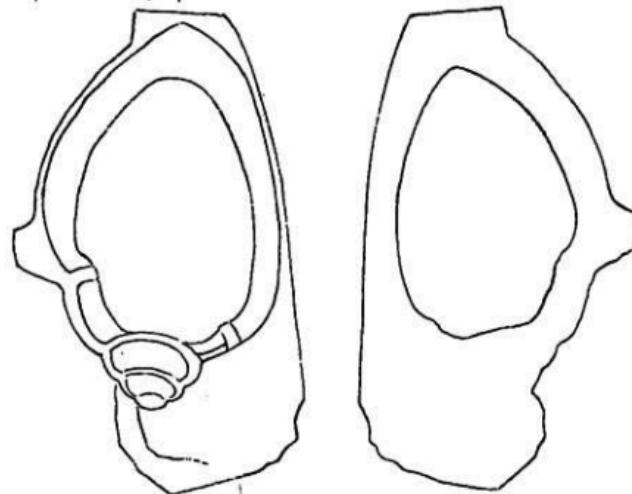


第 8 圖 三 兜 鏽 銅 鏡 (P80)

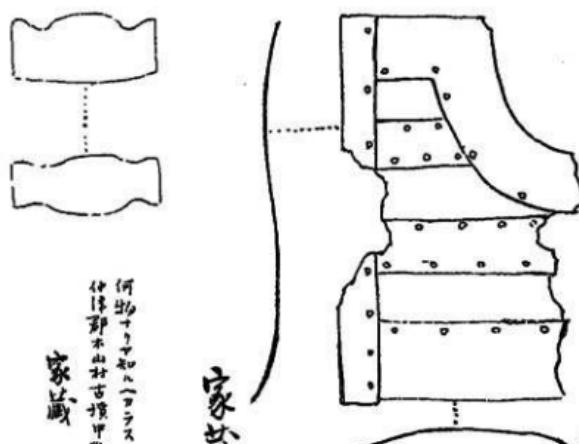


新嘉坡文書館藏

伊豫郡竹山村古墳
日出井ノ原古墳ノ人骨遺物



第9圖 人骨遺物 (P262)

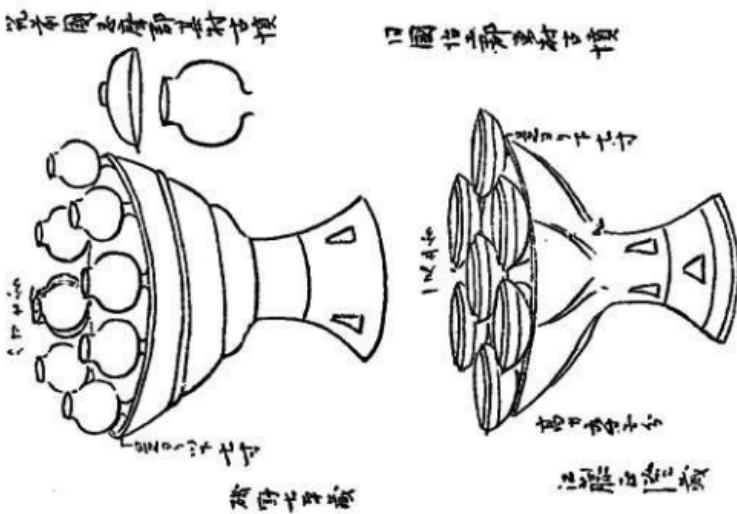


何物トサカヘコラス
伊豫郡木山村古墳甲數多之リ出テ
家藏

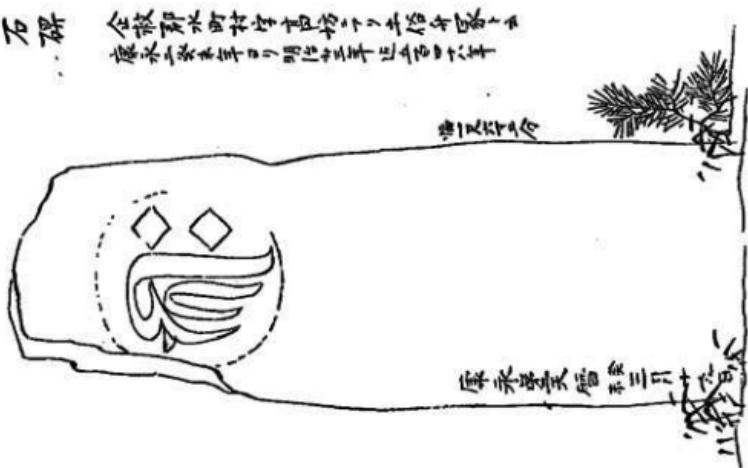
第10圖 短甲 (P3) 三輪玉 (P101)

其四
甲
仲津郡花熊村

第11圖 瓷瓶器 (P.345)



第12圖 石碑 (P.105)



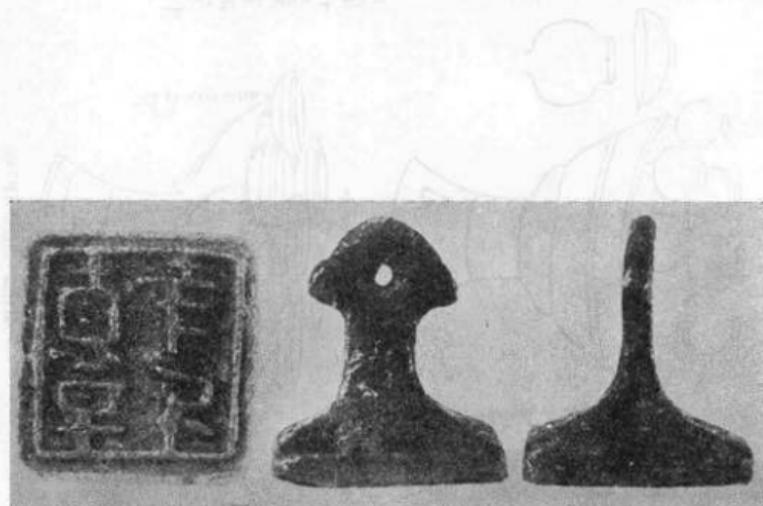
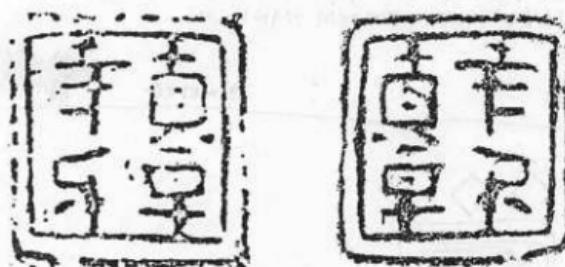


写真1 真口寺印（註9書より）



第13図 真口寺印（1印影 2拓影）

横の國ひろよし（花押）

喜永四季春写之小金丸種

日鐘の音も聞えず

蟲神の國なり

しるき

沖つしまかな

此歌種復^{モロコシ}字^{モロコシ}力^{モロコシ}源^{モロコシ}鳥^{モロコシ}ニテ詠メルナリ

此防人日記は、故平野園臣^{モロコシ}小金丸種^{モロコシ}手写セルナリ。

嶋をさ、みなと近き家をえらびて盃取出てあへす。愛より別船に移り乗て、申の時志賀嶋に着たり。皇神に参りて、海つ路のやすけかりしをかへりまうし。御前をまかる時、うなばらを見渡しつゝ、ゆくさくさみれどもあかず打あげの浜のありそによる白浪志賀か葉の塩衣。又、和布刈塩やきなどこそ、いしへ人はよみたりしに、今は塩はやかず成ぬ。その塩やきしあとは、御社の東、打昇の浜につづきたるところ也。こよひは此嶋にやどりぬ。

(四月) 同四日。けふなも福岡につくとて、人々ほのぐらきに起出で、物打ちかたらひ、たはぶれわらふ。^(故)さとの近づくを悦びて、つねよりも心からき成べし。船の来るほどとて、髪のわゝけたるを拂り、衣などとりて着かふとて、

崎守の肩にまとひし鹿ごもなれて中々かへうかりけり

日ごろはうしとながめしやへの塩路も、けふをかきりとおもには、心のこりてうしろねたくたちいで、巳の時過るころ船にのりて、満潮に帆ひきたれば、立はしりわたりたらんやうにて、午の時にはつきぬ。愛は、さきに船乗せし荒津崎の西の磯也。とかくするほどに、

家人も友人も、聞つけてむかへてくる人のよめる。

秋風に帆を引つてわが背子が雁よりさきにはやく来ませる
とよみたり。いといたうめによめるうだ、

わが背子が深き心をあらつ時みつ潮海にたぐへてぞみる
かくて、かへりごとまうしにて、家にかへらずして、直に國の殿

にまゐる。日も山端にかくれなんとするほど、家に帰り着ぬ。庭をみれば、わがゆく時は、池の藤原のやゝ長く垂て、今日五六日ばかりも在まだば、などおもひつゝ出立しを、其日頃経る迄はわれがて成しを、今見れば、花の咲つらんとおぼゆるさまもなくて、下葉のやゝ色付にける、わづか四月・五月のほどに、春と秋とのうちへなる世のありさまは、あまたの年経たらんやうになもおもはる。されども家之内は、うからやからつどひて、いとにきびにしかば、かたみによろこびあへる。いろせに見すとて秋くれば草はみなからうつろへど吾君はいやさかえますちかきあたりの人など訪ひ来る。盃とりかはして、^(更)行までうたひまふ。浪風のおどろくしきにはやうかはりて、うつぱりの塵もちらばかりなり。

奥書

藤田正兼大人云。吾うつせし本書におく書あり。年号干支はなし。とし道ひるよしともに誰人ともしらず。

これのみは、此つくしの國の殿に仕へ玉ふ、瑞枝さす青柳主の宗像のおきの嶋に防人にまかり玉ひし時の日記なる。さくら井の平川千瀬のこひ受てうつしとり物せられしを、吾友とし道かの千瀬の子千春に講うけて吾にも見せつ。唯よみしまゝかへさんもくちをしきて、手あしきをもかへりみず、写しとりしになん。

比^ヒこ^トに取^いれたり。其彫れるさまいと工^{ハシ}なり。その手も磨れたり

とぞ。二町ばかり田島村のかたはらに清水有て、御炊ノ水といふ。

かたはらに碑たてり。天真名井をうつせしよ記せり。けふもいと
あつければ、御社を出で、前なる家に入て破瓶など取出して、しば

し休みて、江口川の橋を渡り、吉田の鏡国寺にまづ、御社に五六

丁ばかり東北の山に、昔は(大)なる寺成しと見えて、廟の字に子院
の處多く残れり。此寺、龜山天皇の弘長の頃、宗像氏建立して
定額寺とし、皇豐といふ僧を住む。文永二年の比、太政官符宣あ
り。又田島村に大宮司の館趾あり。あるひはこの村内の山岸に、
椎葉の紋ある石あり。これを割てみれば、枝葉鮮かにしてその紋悉
く變化、楓の樹の年経て化だる成べし。宗像氏の家の紋三ツ柏なる

が、おのづから肖^{ハシ}たりとて、神紋石となんびて、世にもてあそぶ
人多し。

神の代にさかきにとりし檜のはのかたしはとさへなるがあやし

さ

かなたこなた見めぐるに、日も西にかたなきねればとて、勝浦より
船乗して、勝浦近く漕たみて大島に帰りぬれば、ともしさす頃にな
りたり。今宵、河野ぬしがもとよりつかひ来りて、しゆて率て行き、
杯とりかはして、いにしへの事など物語るに、あるじ日本紀をよめ
とて、せちにこふ。けふし朝とく田島に行くて、日ひとひそびくら
しつれば、夜ふくるにつけていたうつかれねども、もだしがたく、

神武の御巻のはじめのほどをなん、いさゝかよみ(て)やみぬる。

同二日。大島の北のかた、御浦といふ所に物す。これは里より十八町

あなた、岩瀬の西に、神つしまにむかひておくまりたる入江あり。

其江の西にさし出たる岩崎を、神崎と云。磯の岩村に大なる馬^{ウマ}ノ蹄
の址あり。又、人の足跡なる小數多あり。彫たるが如し。潮干ぬ
れば見ゆ。波かぞへて、かなたこなたの岩角に、はしりあるきてみ
るに、寄浪あらき所にて、朝夕うちはふるにも消ずして、かくさ
だかにのこりたるは、いともく奇しきこと也。爰なん、宗像の神
のはじめて來着玉ひし所といふ。風土記に崎門山といへるは、こゝ
のことによ。

吾もみつ人にも告ん宗像の皇御神の踏しあと所

後の代にいひつぐがねと皇神の御あと所しかしけらしも

岩の上に土と踏なし万代に神さびいますこれのあとどころ

あらいそのゆつ岩むらに残るあと今のをつゝに見るがあやしさ
磯山の上に窟あり。高さ深さ丈ばかり。窟の内左右の石壁に文字
あり。消て見えず。いかなることを書たるにか。又、此崎の東海の
岸にも大なる岩窟あり。爰にも文字を彫たれども見えず。近き頃と
の鳥に鰐をとる。その脂を煮る(とて)、脂の岩を多く割とりて塙の
構へにせり。其矢をいれしあと多し。かゝる神地をも憚ることなく
物するは、いやしき鹽のしわざながら、いとかしこき事になもある。
同三日。朝まだきに船を出して、阿閉鳴をおふ。午の時斗につく。

に叙し、そのうち「さあよめん人を選て、此社の神主とし玉ひて、徒
五位に叙せられしこと、(統日本後紀等)に見えたり。中頃までも、宗
像氏に二人の大きな勢ひの人有しこと、宗像記にいへり。大宮司の
の家一人となりしは、いづれの比のことなりしにか。尊氏道を追出
され、織の兵を率て此国に落しられし時、大宮司氏俊力を添て、
遂に筑紫の軍兵を起して、京を傾け奉りし事、そのなりの書どもに
見えたり。これよりひたすら武士の如くなりて、ますく富榮えぬ
大かた、氏後の時よりや、一人のかたはおとろへん。今宗像氏に
伝ふるには、延喜天皇の子に、（ゆきのみこ）清氏といふ人あり。此人、大宮司の
（みやこじ）祖にして、近代貞治七拾九代祭祀を掌りしといふ。いとも／＼
いぶかしき事也。延喜の御時より天正の比まで、七拾九代経たり
いふは、一人の世餘りに短くして、いかにぞや聞ゆ。周ふに旧事記
に、吾田片岡命の弟に、（みやこじ）健麿貢田須命あり、此人は、（みやこじ）古命也。
これ大神氏にして、（みやこじ）瑞應天皇より正親町天皇まで九十八代経ぬ
れば、宗像の七拾九代は、大かた此間の事にして、清氏といふは、
吾田片岡命が、その御子あたりを伝へ譲りしならん。清氏といふ人
物に見えたる事なく、延喜の皇子にはおはしまさぬをや。
田島社の雨、山上の宿家といふあり、先祖へて清氏の御代と云。寛永年中、（わんえいねんちゆう）社内所の時事を引て石垣
社内を修せり。是古事あり。これは五比社内所をつせり。凡て、家々の伝説には古事多くして
やゝもすれば皇孫と名のりて、尊氏と認る事、世々の史にもみえ

て、上代にもこれを偽り犯せること多し。まして源平の比は、武士の伴王氏を出て遠からずといふ事を、家の光とせしことなりしかば、宗像朝臣をも、皇孫ならぬ事を物げなくおほえて、かの源氏等としく、人にも誇らんとて、自ら延喜の皇子の裔也といひし成へし。此御社をも、古は八幡宮とさへ申奉りしぞかし。八幡大神は軍神にまじて、源氏の人々をはじめとして、武士のいたく重みし奉るによりて、絶て此社にもあらぬ御名を負せ奉りし也。これらをおもふに、いよ／＼清氏の延喜の皇子ならぬことしらる。氏俊は其身社に仕ながら、朝敵源氏に与して、其後裔は、又、氏の祖をさへ、あらぬ事に物せられしは、いと罪深くいひかひなきこと成べし。氏貞に到りて、さばかりの旧家を跡なく滅されしも、ひとへに大神の怒りおもほせしもの也。尤甚る御世の探湯のことをおもはざること、氏人大きなる過ち也けれ。天正の次までは、宮人七拾余人ありしが、今わづか十三人になれり。此うち深田氏二人横氏一人は、何れも宗像朝臣にて、昔の大官司の族也といふ。御社の側に、弥陀石碑長四尺八寸横厚九寸あり。むかし平内大臣重盛公、宋国^のの育王山に沙金二千両を送らる。内大臣薨玉ひて後、かの寺僧、大藏經と裏裏にありし隋の陳仁競が書たる陀訥經を模して、石仏の背に刻て贈れり。其船、神の淵のかたはし、江口といふ所に着ぬ。既に此時平氏亡びたるあと也しかば、これを受入る人なし。宋人せんかたなくて、大藏經を此社にこめ、石仏を江口のほとりに建置て帰れりといふ。近

左辨官下 太宰府

応且任國司厅宣旦依往阿弥陀仏勸進状、免用管氣前國宗像社修

理用途

同國曲村田地跡拾町事、

右得彼社神宮等、去月日解状你、当社者、天照大神降米之靈地、

日域无双之仁司也、仍被寄附科田、勤行式日之神事、但於

大小七十余社之修理用途者、往古以来、以葦屋津新宮浜漂薄之

寄物、致沙汰、送数百歲之星霜、而今往阿弥陀仏、哀彼漂

薄之難、築孤島、助往還之船、休風波之煩、因茲修理用途、

已以无足之由、以開東狀、經國司厅宣奉畢。望請為恩、

以曲村為社頭御修理、沙汰之國屬官符、欲備後代之龜鏡者、

權中納言藤原朝臣宣、奉勅依請者、府宣承知、依宣行之

寛喜三年四月五日

大史小槻宿祢（花押）

小辨藤原朝臣（花押）

永寿元年（一八二〇）の御輪旨にも、孤島を築くよし見えた。又、曲村賜る

よしの延慶の院宣あり。次に載たり。此往阿が事は、統日本紀の

神聖元年（一八二〇）のところに見えたる、宗像朝臣深津が、僧奉応にすゝ

められて、金崎の船頭を造りしに似たること也。

筑前国宗像社修理料所曲村事、任寛喜宣旨如元所被返付也。可令存知者、院宣如此。悉之以状。

寛喜三年八月十五日

太宰府

また文書

左辨官下 太宰府

応下知管筑前國、除萬時法師党類以下朝敵與同外諸國輩、當時知行地、不可有依違事。

右大辨官藤原朝臣宣房奉勅、兵革之後、士卒民庶未安堵。仍

降絲綸、被教牛羅、而万機事繁。施行有虞、加之諸國之輩

不論遠近、悉以京上徒妨農業之榮、邊背撫民之儀、自今

以後所被闇此法也。然者除萬時法師党類以下朝敵與同輩之

外、當知行之地、不可有依違之由、宜仰五鷹七道遣之。

勿敢違失。但於臨時斷者、非此限者、府宣承知、依宣行之

元弘三年七月二十六日 大史小槻宿祢

小辨藤原朝臣

などあり、周防にもち行しこは、五百餘紙ありしと云。いまは二

百七拾通あり。又、尊氏の鎧・軍配・團扇等あり。又鏡田一面あり。

其形（因縁）いと古めかしきもの也。氏俊の息の妻は、大内義弘

の女也しかば、義弘とはかりて、朝鮮に使を遣して貿物し、かしこ

の船をも愛にまねき。其時の勘合印也といひ伝ふ。宗像氏壽・氏

俊が、彼國に使を遣したる事は、朝鮮の人の書たりし、海東諸國記

といふ書にも見えたり。（また）黒き金假面あり。この宗像朝臣の

事、古き物を考るに、始にいひたる吾田片廣命の裔にして、君の姓

也しか、飛鳥滑見原朝の御世に姓の朝臣（こじん）といひしは別姓天皇の御子也と云ふ。天皇の御子は考るに、古き物を考るに、始にいひたる吾田片廣命の裔にして、君の姓

神の告ありて田島に迁り玉ひといふ。御前にぬかづきて、

すべらぎの御世守らんと久かたの天より爰に降りたまひつ

宮人にとひて神宝を見る。社記あり。その中に、

西海道風土記曰、宗像大神、自天降居_一埼門山_一之時、以_二青囊玉_二

一本に八尺置、奥津宮之表、以、八坂瓊杵玉置、中津宮之表、以、八咫玉とあり。

鏡置辺津宮之表、以此三表成神體之形、而納寶三官、即

隨之，因曰「身形焉」。後人改曰「宗像」。其大海命子孫，今宗像朝臣

等是也。云々

人皇第七代孝靈天皇四年仁、自出雲國桑河上、筑紫宗像仁御遷宮

第一神者、集海淡築鳴、示_二居於遠海之息_一、未來靈可_一降_二伏異國_一

之由、有二御警留。件島(治)、則号息御島、是日本与高麗中間也。
(文子)

居遠瀛、是於泰_一号_二田心姬命_一。第二神者、示_二居中海之息_一、今号_二

大島一是也。巖原奇瑞多之居、是奉_レ号ニ滿津姫命_一。第三神者、示ニ

居於海邊、今号=田島=是也、居=海浜=是奉=号=市杵姫命、云々と

いへり。此外ハさまぐあやしき事などを記して、上古の物ともおなじものとす。

もはれず。此社記は、後花園天皇文安元年に、大宮司氏俊、上代の

社記を改め書たりといふ。三柱の御まし所 古の社記に見えたると

古事記・日本紀・この説々とおのく異にして、何れともわきがた

きが中に、奥津宮の市杵島姫にまることは、神の御威儀の殊に勝れ

玉へるによそりたる御名にませば、何の疑かあらん。安芸にも、此

官を迁し祭りて、嚴島といふ。市杵島姫のませばなり。
記賀島より迁し御

第三回

酒をもよし配せりといへり。今も家入人 又、この田島の宮を 満津島姫命 といはん
か。旧事記に「おはなむのとこと」の異讀といふ。田島の宮を 満津島姫命 といはん
命生まし、此御神・己貴命(すきのみこと)云々辻津宮坐神、高津姫命(たかつひめのみこと)祭り事代主
閼命は、宗像朝臣の遠祖にして、世々辻津宮の側に住て、二柱よりも、此神を主と祭りて、今もしかり。され共、旧事記に、漢津宮を
田心姫命としもいへば、又、おのれさきにいへるにたがへり。ともかくにも、この三所の御名のことは、定めがたくなんある。又
古き文書またあり。繪旨・院宣・序下文等を始として、
より足利義昭に到りて、世々将軍家の下文、又、探題或ハ太宰
少弐そのほか、近き國々の城主等の書翰、謹狀凡て百六拾餘通あり
こは天正十五年、豊臣闇白、つくしを平らけ玉ひしとき、大宮司七
拾九代、氏貞去(じゆうどひじ)天正十四年に卒して世嗣なかりしかば、氏族のうち
いづれをたてん、かれはたてじと、家の子どもも乱れ争ひて、いまだ
家繼なかりしに依て、古くよりしれる限の神領・私領悉くをさめ
とり玉へり。其後、氏貞の女、周防國の草刈刈馬といふ人の妻とな
る。此時、ふるき物どものかぎり、唐櫃にをさめ入て、かの家に携
行れによりて、二百年ばかりのほど、この御社には伝らざりしを、
時のゆければにや、近きころ、此郡の司富永(ふくみよし)某(いつこ)とかいへる人、
これをなげきて、さまぐと斗りいたづき、年月をつみて、再びも
とのごとく、愛にとりかへせり。いといさをしきこと也。其中の
一二二ヶ書を書写したり。ここにのす。

なん。木立のうるはしく神さびたり。後拾遺集に、右大弁通俊の筑紫よりのばらるゝ道にて、「あなししづく追門の潮合に舟出してはやくぞ過る小星形山を」と読玉ひしはこにて、追門のとは此岬と地島の間の海八丁。をいへり。今も京に行には、この追門を過てゆくめり。此山麓に總鎮の社おはします。宗像五社のひとつ也。宗五社とは日本神事本末社をいへ。此社の名は延喜式にも載られたり。今いひ伝ふるは武内大臣、此やまのいとうらへはしきをめで玉ひて、われ身まかりなば、神靈は必この地にとゞまるべしと宣へり。故後に祠を建てかの大臣を祭るといふ。社の南東のかたに、大臣の父母を祝ふ祠もある。『いづみ萬原大明神といふ。万葉集に、千早平野、千早御前を祀れば、そのみ既に神社ませしなるべし。こゝにて御軍の幡を纏め玉ひし故に、總鎮の社といふとなん。もしくは經略の御代よみたれば、そのみ既に神社ませしなるべし。こゝにて御軍の幡を纏め玉ひし故に、總鎮の社といふとなん。もしくは經略の御代にまるでし兄姫によしあるか。

兄姫大明神とすまつならぬ又緒の岬ともいふよしは、岬の艮五町斗に大なる鐘の海中にあり。いづれの御世の事にか有けん。韓國より鐘をもてわたせしを、愛にて海に打はめたりとなもいふ。その鐘のあたりは、いまもさだかにそれぞとしらるゝと、海人の指さしてをしゆ。宗像朝臣氏といひし人、文明五年に烈しく大潮起りて、海の中、鳴たまきければ、皆人かしこみて、大越をとらんとて、人をおほくつどへ、舟をあまたうかべ、海士をいれて鏡に大網をかけて、曳あげんとせしか共あがらず。俄に風雨

ことの事やみぬといへり。其後、慶長九年、前園主(さなまつ)長政朝臣地島の渡^はを築玉へるぢなみに、此かねを揚^あんとおぼして、爰に來給ひ、新に波頭を築きて、舟どもおほくつどへ引玉へどもあがらず。二日三日経たりしに、又、さきの如く風吹いて、雨はげしく波たちさわぎてければ、遂に鐘をとる事をやめ玉へり。かの万葉集に、^(金)師としもよみて、此時既に地名としもなりにたれば、鐘をもてこしといふは、いとも／＼もがれる世のこと也けんを、唯里の詞にのみ残りて、いづれの書にもみえぬこそちをしけれ。鐘崎の里の上なる高山を^(ゆきやま)山川^(さんせん)といふ。沖つ島よりつねによく見渡さるゝ山也。其異^(いたぐ)につづきたるは孔大寺山也。^(くんだいじやま)山上に孔大寺^(くんだいじ)あり。その東に宗像山^(むねさま)あり。いつれも高山也。神淵より田島に行には、これらの方へはゆかず。されども道より見渡さるゝ所なればかきつく。

辺津宮は、神淵の異一里、田島村にあり。宮所は、山あひの田の中に在。其地広く大にして、木立物^(もだいもの)ふりたり。御まへに御舎^(ごや)あり。橋をわたせり。御社は乾^(いぬき)の方通に大鳴に向へり。本殿・拝殿・渡殿、神樂殿・御炊屋・宿直所・舞台・籠櫻^(くらわき)・宝藏^(ほうざう)・経蔵^(きょうざう)宋社二十五社^(じょうしゃ)は七十五社者^(しちじゅうごしゃ)にて五十々に散在せり。現今^(げんじん)の世に拝み奉るにも、尋常ならぬ宮のたゞすまひ、ましてむかし、御社の栄へましゝ時は、とおもひやらせ侍る。此御社には、田心姫命^(たじんひめのこ)を主^{(は}と祀りて、鯨の二柱は(御社の)左右に別廟におはします。いにしへの辺津宮より愛に辺り玉ひしは、後深草天皇の建長年中^(けんじょうねんじゆ)、大宮司四十八世長氏といひし人のために、

に乞ひ乞ひのむばかり也。子の時ばかり空少し晴て月さし出、なごろもすこしく和たりとおぼゆる比、いと悲しき声しておらびさけぶ。

すはや舟のよりぬとて、手々に手火をさゝげて磯にいで、舟はからくして漕よせたれども、磯浪高くして、ほとゝ打かへされねべく見えしかば、陸なる舟子ども磯ぶりのよする中に飛入々々、岸に助けあげぬ。人々いかに苦しかりけん。物いへど、舟子らいらへもせで立るたり。まして舟人ならぬは、いける心もなくて打厭るたりしが、人に助けられ、水舟のうちより、衣はしとゞにねれてはひ出づ。されど船の人、ひとりもあやまちなく、さきかりしことを、爰も彼も悦びあへり。かく人のからきみるにつけ、帰るさのほど心もとなくなん。後に舟人の語るをきけば、大島に風守りせしほど、いきゝか触穢のこと有し、これをや神の咎め玉ひけんとぞいふ。いとかしくなん。

同廿三日。海もなぎければ、けふなも舟出すべれど、よべのさわがしかりしにまぎれて、いまだ帰るべき設などもえせねば、あすこそとて、隣のかたの家に移りをり。

同廿四日。庭よしとて舟出す。二三里もや来ぬらんとおぼしきに、風あしとて、又本の如く漕つれて帶りぬ。ことしは、いつよりもあつたりれば、秋も半近くなりぬれど、猶涼風もたゞ。あら磯の小屋の煙たれるに、所せく物打つみたれば、いと暑さ絶やらず。風待などの住るなれど、わびしくて有しやうにあらず。

同廿五日。^{なごり} 高しとて出たゞ。新防人の衆の中なれば、触穢といはらず、磯にのみあさる。

同廿八日。けふは新防人の忌もはれねれば、打つれて正三位社にまうづ。風もかなひれど、舟子どもさきにこりて、いざとて舟出せず。者もなし。一二人がすまふも、たゆたひつゝ、とかくしてつひにやみぬ。

同廿九日。曉がたより、艮の風心よく吹渡りて、海の面もなぎたり。舟人ら猶たゆたひを、日の時近くなりてなも、舟を出せば、なほ日ごろは海浜の住居にわびて、帰るべき日をのみかぞへたりしを。今はと出たつには、さすがになごりをしまるゝ心らす。海（うみ）五里ばかりも来ぬらんとおもふほどより、風はやく強く吹きしきりて、浪の華を咲そばかり也。^{（え）}越より懸浪うちいるれども、追手なればとて、すこし心をのどめてたどりを、申の時はかりには大島につきぬ。

八月朔日。今ふなも辺津宮にまるらんとて、先中津宮にぬかづく。大島より辺津宮に参るには、神湊に船よするぞ直路にはあれども、あしき病を煩ふ人多ければとて、神湊の半里ばかり西（にのり）勝浦と云地につく。愛より田島に壱里半ばかり有。そは神湊の人家の南の辻を經てゆく也。^{（いにしへ）}田島の有し船は、神の直に海に臨て大島にむかひたり。田島にまことにしよばり、船頭のうちにあり。此處づたひ良の方の崎の岬也比岬丸くして海の中にさし出だるさま、屋形の如くなれば、さやかた山ともいふと

なれにたぐへむ妹もあらなくに

(七九) 同十日。海人等漁^{（よさむ）}しをへて大島にかへる。此二日三日ばかりは、海も静なれば煙^{（け）}らんとて、船出を占ふ。神のゆるし玉はねば、と

やみぬ。けふなも占ふ。又さきの如し。もて來し旗鉾^{（はたのぼこ）}といふものを、

一つ正三位社に獻りて長りを申しあかば、やがて船出をゆるし玉へりとてなむ。船び^{（ひ）}らきす。夫につきて、かしこくあやしとおもふことあれど、世に不^{（ふ）}い言端^{（ごんぱん）}としも憚来つるに依て、つばらかには物せ

ずなん。鷺^{（さぎ）}の人に見つけて人は「はぬよしの名なり」。

(八〇) 同十一日。白嶽^{（しらたけ）}の下に行け。此嶽は鷺の艮のはてなる峯也。峯

は青海より直に立のぼりたる一つの大嶽也。岸もなく、磯もなくして、峯の頂まで壁立たれば、猛^{（ひのき）}獸といふとも、かけりつべくおも

はれず。まして、人のほらんことは、かけておぼえずなん。峯の北のかたに谷あり。船より遙に見あぐるに、櫻^{（さくら）}の形して大きに葉も櫻^{（さくら）}よりは長く垂たる木、多く立茂れり。大嶽の海人ども、こ

を振りて櫻^{（さくら）}といひて、その谷を櫻谷^{（さくらのや）}とよべり。此櫻は、おのれさきに志摩郡の呂岳^{（ろだけ）}にて見し備岳^{（そなづか）}といふ木也。桜^{（さくら）}の類にや。

此峯さばかりの高き懸岸^{（さかぎ）}の上にしあれば、目近くえ見る事あたはで、

其さま詳らかにしられず。崎守にある日數もやうやく立ねば、か

はりの舟やくると、日々に山に登りて、南の海づらを詠^{（なづか）}つゝあり、

波^{（なみ）}なども、やう／＼居るべき間近くなりて、いひあやまたずな

りぬ。此島に産業あらう（はな）、鷺^{（さぎ）}等を販^{（はん）}て、鷺やうの物にも出ぬう（はな）ど。古の人は失業たりとんだり、今いふは海人の定めつると思ひていいやしき

(七九) 同十五日。こよひ月いとおもしろし。月は海の底よりぞいづる。「照月の流るゝみれば天の川出るみなとは海にざりけり」とよめりしもいまにしられて、唐和^{（からわ）}のふるきうたの、折につけておもひ出らるゝを、打^{（うち）}すしてながめあひ。

月人のあまの祠^{（みやこ）}とを船出していづことまりとさしていくらんおのれこの四とせ五年のほど、江門^{（えちゆう）}に在て月見しに、草より出で、くさにいるはれど、こよひの月にはくらぶくもあらず。物かはにぞおもひ過^{（すぎ）}さる。出るも入るも、唯波の立さわぐかとのみ見えて、雲かとまがふ山嶼もなければ、大空を海のやうにおもはれて、南の海はおしなべて白銀をしきたらんが如し。

よもすがら流るゝ月の影みれば浪のあなたやとまりなるらん

(八〇) 同廿二日。未の時ばかり、船遙にうかみ来、申の時ばかりに島に着

ぬ。日比待わびたりし防人のかはりの船也。いま一つの舟、わづか

一里ばかりもや隔つらんとみしほどに、俄に空かきくもり、北風烈

しく吹ききり、満ちさわぎて、大海おどろ／＼あらびたり。とかくするうちに、日もくれぬ。いと暗きに、いかゞはせんとて、さき

に來つきたりし舟子ども、あはてゝ磯に火を擧て、爰に／＼と呼け

れども、船ありともおぼえず。浪のそこにや打^{（うち）}れられけん、又は

風に放されて、遠き鶴子浦などにや流行^{（ひきわらわん）}けん。夜あくるにつれて、

浪の音は、千百の雷の鳴はたゞくらんやうなれば、よも此島に向ひて柁を立てはえあるまじ、助けに行べきやうもなければ、人々神

また、巣岐連でふ姓を雪連と書もこれ彼見ゆれば、もと彼國の名の巣岐は雪にして、頗て此鳥より一國の大名となりしにやあらん。筑紫の海人どもの、常に巣岐をば志州とのみ呼て、巣岐・鷦などとおしていふ時は、因名にはあらで、彼小島のこと也。これらも何とかや由縁有げに聞ゆ。こはおのがおしあてのさかしらなれど試に書つく。此島の大神いたく活潑を忌玉ふに依て、山中にてかりにも睡・小便することなし。もし過ちてけがす時は、其地の土をすくひ、海に持出で、磯に捨て、清き砂を、先の土取し跡に埋みて、本の如くならしおく。是を犯してしかせざれば、忽狂乱などする。近頃にもさる人ありて、誰もよくされることぞかし。さるべき説にて、昨日より大なる竹箇作り置て、緒して腰に巻るやうに構へ置ければ、けふなも、人々簡を腰に付つゝのほる。峯を下るには、萬かづら・木の枝・岩角などに懸りて、いとわづらはしく、吾も人も行なづみて甚見るしくなん。爰より御社の東の峯をたひて下る所を金崎といふ。こは先に、雄崎の海人等の漁に来ていほりせし地也。故に号けたり。いまは来らず。此峯の上に、松ひともとたてり。茂山なれど、松樹は鳴の内に唯これのみなり。

ありそみにたてる山松なれをかも鬚とぞおもふ独しあれば

同四日。巣岐のかたの海に、白浪の山のごく高く見ゆる。怪しみ見るほどに、くろく大なる魚の、浪をかづきて浮沈つゝ行也。かの物しれる海人、せみといふ鰐也といふ。からてに、鯨魚波・浪瀧浜

開、といへりしを思ひ出られたり。此海人は肥前国松浦郡の漢浦といふ所の者にて、鰐を取時に、海底を瀧・鰐に網を張ることを業とする、はざしらふ者なり。こたび大島の海士にやとはれて、六月中比より来て、かのあたりの事など物語るに、すこしは旅の思ひをはるけぬ。

同十一日。西の方より大なる竹・浪のまに／＼ながれ来る。船漕出で取あげみれば、鐵竹なり。長さ六尋ばかりなり。網の泛子やうのもの也とみて、根かたに穴を彫たり。ところ／＼石花・蛭などつきてをかしき物也しかば、人々花瓶などに切て觀ぶ。

から國を佗し愛により泛子の網手やひとりうきねすらしも同六日。海人のかづきを見て、

かづき得てわれに得しめよ大海の水底をらししづくしら玉爰の鐵はとる人稀なる故に、世にこえて大なれば、玉もありぬべしとて、磯に出で、日々に海人の取得たる鐵のうちを探る。白く光なきは勢も多く取得たり。けふなも、青く光あり、其大き大豆ほどなるを得たり。人々うらやみて、ねたきこと共をいふ。

わたつみの神の網やたえぬらん浪間に拾ふあはひしらたま吾はもや白玉得たり皆人の得がてにすとふ白玉得たり

あやなくも来よる玉藻のうつくしみ

防人日記 下

七月二日。つとめて、一の嶺にのぼる。峯は磯より三十町ばかり、いとさかしき岩のかけちにて、いつこを道ともわきまへず。石綱あるは木のうれなどを踏て、み山の猿ならねど、かなたこなたにつひわたり、やう／＼峯に登りつきて見れば、峯は只籠より立のほりたる一つの巖也。その岩白くして遠く見放れば、山はなべて雪の積たらんが如し。これより艮の方をさして峯三そばだらたり。此みねは、西南のかたに在て最高く、見る二ツはやく低くて、目の下に見渡さるゝばかり也。そのいやてにある峯を白螺といふ。こは餘の峯よりも、其いろ殊に白き故に号す。峯の岩に尻かけて、西北の海をはろ／＼と打見渡すに、長く引はへたるは津島也。つねに磯より見ゆるは、國府の上なる銀山、こは誠に高山にて、かの辺にては外にかぞふべきもみえず。日ごろ小島の多くならびたりと思ひたりを、愛よりみれば一ひらの大なる嶋にて、銀山の北のあたより麻威なすひきはへたり。銀山の北のかたに、山の絶る地の見ゆるは今切の追門とかいひて、近比山あひを掘通し、東より西に海門をひ

らきたり。鶴の浦の方と国府とは海門を隔て二の島のごとしなど、率てのぼりし海人の其あたりの事られるが、さしてをしゆ。けふは風もふかねば、海の面も鏡なす澄むたりければ、しらぎの国や見ゆると、人々見放れど、秋たちていくかもあらねば、夏のけはひ残て、対馬よりあなた薄雲はれやらす。

ふる郷のかたりにせんを榜角のしらぎの国に雲なたなびきいましばしありまたば、などいひつゝ、土さけて照る日をもいとはずまもりをるに、やゝありて雲の立のほるまに／＼、眼如山の煙などみえたる、人々あなやといふ。そは鶴の浦の東北と遙そきて、雲かとのみあやまたる。此島より北の方也。八月・九月比の、清くさやかなる時ならましかば、とぞひあへりける。

向さくる山にし有りし大きみの官家となりし百濟國は
國津物さまにまつりて御黒鶴の部に仕へし新羅國はや

言さへぐ高麗のこきしも天皇のやつことなりて仕へまつりし西南の海をかへりみれば、毫波の島いとよく見ゆ。さきの海人がかたらく、風本の方一里ばかりに白き岩嶋あり、周廻二三町ばかりもやるべき、嶋の上は草木なし、海の上に雪の浮みたる如くなる故に、雪の嶋となもいふ、其島雨風はげしく海あれぬべき時は、かねてそのいろかはりて真黒に見ゆ、あやしき島也、そらの海人、是をうかがひて日和を占ふに、迷ふことなし、といへり。これによりて、つら／＼思ひめぐらすに、古き書の中に、一岐を由伎と訓み、

に落ちたり木葉をはらひ、(石をしきなどしてつかへまつる。神山の内に入には)つねに声とゞろかしてゆく。もし、ひそかにゆけば、神遊び玉ふにゆきあふといひ伝へたり。

五ちはふ神につかふと崎守は岩ねさくみてけふもまるです
とつべしり哥ひて、朝ごとに御山をのぼりくだりす。

五月朔日。^(五月初一)けふなん、高の社にまわりて、^(社頭)社頭を聞つ、と人のいひければ、

高々にまつ吾をおきて深山^(みやま)へ鳴べきもののかしこほとゝぎすす

嶺の西の方、対馬にむかひて、大なるいはやあり。高十丈ばかり。深さも同じほどなるべし。潮のみれば、嶺の内に浪打いる。又、

その少し南の方の磯に、高六七丈ばかりの劍のさましたる大巖あり

しが、近キ年大波にてをれたりとて、三段になりて。此あたり

の磯の岩ども、皆あやしき形也。又、高き岩岸に、劍を懸てのぼり

下りする所あり。岩の上より、水のしたゝり落て打ちる。故^(ゆゑ)霧雨ともいふ。そこをゆくとて、

狹界^(せうめい)ふるいはのかけちはかしこけどわれはかよほん万代までに

神山にのぼる山道にて

神山の木のくれしげにかほ鳥^(みどり)の声のこほしきこの朝けかも
木のくれ暗たどきもしらにおぼゝしく我行道にたれよよこ鳥^(みどり)

磯の山の東のはなより、遙に長門なる角嶺のみえければ、

秋の野の萩ふみしだき鳴く鹿のつゞく角嶺没^(みだり)まより見ゆ

六月朔日。西北の海を見わたして、

しらきべは夕立すらし百ふねの津しまの捺ろゆ雲るたちくも

この五日六日ばかりがほどは、大なる龜ども、磯ちかき海にこゝら浮出でてそぶ。又、五月の初つころより、いるかのいと大なるが、

この磯べちかくすみてゐたりしが、近きころは見えず。

廿七日。きのふより海あれ、白浪いやたつ。防人のやどりの南の磯に、太鼓岩とて、岩の根地中より生出たるにあらず、磯にはへたる

岩の上にすわりたる岩あり。岩の下のほど、間ある中に波の打入て引落す音、鼓をうつに似たり。かれ鼓岩といふ。「立浪につゝみのおとを打そへてから人よせぬ沖つしま守」とよめるは、此所也と、

貝原翁いへり。此岩戻の打よする度ごとに、ゆら／＼と動くを、人々あやしみて、其大きさを量見るに、高三丈一尺三寸長四丈四尺横式丈

五尺あり。また、向ひなる小島は、波の打よするさま、すさまし

さ譬ふべき物なし。こはよのつねの磯の岩など浪の打こすとは殊にて、深瀬一面に高くもりあがれば、嶺は海の底に沈て見えず。海低くなるかと見れば、忽ち嶺あらはれいづ。四方の岩岸より、潮のた

ざち流るゝさまのかしこき、胸もとゞろき、目もくるめくばかり也。

磯もくづれぬ、と打なみに、防人の家も、浪にとられぬべく覚えて、手々に器などひさげて、高の小屋にのぼる。いにしへ家を大蔵にとれし

あり。その蔵のあるところを高といふ。曉がたより潮のおとよわりて聞ゆ。

釣垂れしに、大魚のうなぞこより溢出で、鰐をたてゝ浮沈む。その大きさ乗てこし舟にひとし。人々恐ひて、岩の陰にかきつきふるひをり。(金)あまともは、かれとりてんなどのへりありあひ、鉤取のべ、岩

の上に立わたら。魚は青海をとよもし、神のかたに出ぬ。よくくみれば、鮫魚にさりける。

おきつしまを見さて、

こゞしかも岩の神さび福草(三一)のみかみの據に雲るなびく

此嶋の東南の方、海中に、御門柱(御門柱)とて、高さ七丈ばかりの岩、柱の如く立のぼりて、二ツならび立てて、沖つしまに向ひたり。其かたち怪也。兩岩のあひだ、十間ばかりもやあらん。其間、海甚ふかし。ふたならび大海の原に立ならぶ御門の岩見るがたふとき

或日、御社にまるりて、

天地の始の時に天照す 日女尊 味津のあやにかしこき

(神語)のらし給はく 三柱の姫大神は わたの北の道の

みなかに しづまりて 御魂命の桺木の弥つぎくに 知食

天津日嗣を 守給ひ 督ひ給へと 言依し よさし玉へりこそ

故に 御ことのまにま あま雲の やへ振わけて 筑紫なる

崎門の山に あまくだり いまし玉ひて 水江の 青森美玉を

神つしま 此大宮の みしるしと いはひまつらし 八坂瓊の玉は 中津宮の しるしにおかし 八咫鏡 とらし玉ひて

辻津宮の 神の御事と のり玉ひ おかし玉へり」しかれこそ

みたからを冲つ御しまの此みやにしづまります皇大御
神御鳴のめぐりなる岩に、金おほくあり。そは浪に打出されて桃の大さなるもあり。又は岩の缺たる内に、切金などい物の如くなるがいくらも出るあり。又、水晶など見る如く、方に刻立たるやうなる黒きかねの出たるもの。打わりてみれば、中は鐵の如し。中に水の鳴といふ所のあたりの岩岸、すべて金のみ也。雨降て晴なんとするころ、日のさし出たる時などぞ、こゝら光りあひてきららし。その岩岸に水のしたつる所あり。土さけてて夏の日にもかる

ことなし。もろくの病をいやす。陶物あるは竹筒やうの物に汲て持返る。国人いたく重みしあへり。此水の流れ出る下の磯の岩角に、金のいろしたる小き海鼠れり。俗に金海鼠といふ。おひ人のわかゆとふ水ぞ沖つしまありそ岩井いざむすびてな目かがやくこがね花さく岩のまゆいづる走井のむはしよしもはしりるの水底さへにてるまでに五百箇岩むらにくがねかゞよ

ふ
級戸辺のいぶきしづけられ、韓人のよりくとふ事もなく、手むだきをれば、防人等は、ひたすら神につかふる人の如く、朝夕に御前

反歌

いまのをつゝに 福草の みつのみたからを 三所の 神の御形と をさめ給ひ いつきまつれり うべな／＼ 身のかたの宮と 別名に負せり

十六日。大神の宮にまるるとて、まづ正三位の社にぬかづく。岩さきのさし出たるところに御社あり。また側に、「荒船社」、「經子社」あり。

岩崎の(下)を御手洗といふ。岩間に波の打ひる所あり。其海に船の形したる岩瀬二あり。荒船岩といふ。あらふねの神をいはふよし。へり。夫木集物名に、「葉も葉も皆みどり成る深岸はあらふ根のみや白くみゆらん」とよみしは、愛のこと也。と貝原翁いへり。正三位社より坂路五六丁ばかり登り行ほど、日のめもみえぬ迄木立しげれり。宮地は一の嶺の麓、大なる巖の物の足のごとく三ツ聳たるはざまにおはします。いと神さび、心すこき所也。神社・拜殿・本社十五区神社あり。御殿の前にからなり。立御前をろがみまつりて、のりとをさゝぐ。

懸も畏き言も。緩に忌々しき濱津百爾鎮坐須田心姫命・満津姫命・市杵鳴命と御名を申て、称誂御幸る三柱乃方靈神等乃大前長良み長も申須。種磨皇朝の上都(大御代乃)大御手風を痛久暮奉り古き御史等を。璞の年月重子雖院著者從来浅き心専真白玉潔得る事之難久。足曳の山乃蘿山の浅き智は薩豆羅可取得き手若む無在き。可畏皇大神ハ御威威過早久世人を幸^{トシ}給ひ守給ふ事、清潮の赤益尔御坐べ、廣應折申願申事を、神在隨安く平そ聞食、真^{マサ}寸美鏡^{ミツカミヅク}拂羽夫留事の如く、上都大御代の大御手風等、百廢も不落^{ハシマ}明らに教給ひ令悟給ひ、又僕我親族産子の八十締連も、常盤に堅磐に伊賀志夜久波板の如くに立栄志朱

給へ、と小鹿如膝折伏、宇事物彌祖^{ミツカミ}抜て、^{ハシマ}恐み申す。

神社の山のうち、何となくかぐはしく、心もすがくしく、かの神薬哥に、神薬のかをかぐはしみ、とうへるも、かゝるをりにこそ、とおもひえ侍りぬ。祭終りて、神主の斎屋にてえらぎす。舟人とも酔しれて、岩坂のけしきをよろぼひつゝ登り下り、國栖人ならねど、口較をうちてぞあそぶ。

十七日。おのが家に在し櫛櫛をもてまわりしを、御前にうゝとて、そへてたて(ハシマ)ます哥。

霜おけどいや常盤なる^{ミツカミ}とこよもの^{ミツカミ}あへたちばな^{ハツカ}ほつ枝に白和幣かけしづ枝に青にぎてかけはろゝにいこじまるりてかしこきや神の御前にほりうゑてのみまつらくはこれの葉のとこしきが如^{シテ}これの実のかぐはしきごと万代にさかえをゆかん皇神の御魂たぱりてちはひ給はね

反歌

時じくのかぐのこの実をまつり置て我もあるてんそのとこしき

に

十九日。小屋端にあさる。此しまは、神つしまの東南廿丁ばかりに在。高さ七丈ばかり。なべて巖のみにして土なし。木もなく山の上に草少しおたり。岸にいがひ・さざえ・蠣石花多し。深き岩の谷に、浪の打入音、雷のごとし。あら・すゞきなど釣んとて、岸に臨みて

四月期日。同じ所なり。瀬津しまにわたる人々、愛より、朝ごとに

海に入て身そぎす。そもそも此津は、いつしき聖神の静まりますけ

にや、人ごとに、物いはひして、けがらはしきことを、いたく是はざ

かる。身まかりたるをいむはさらにもいはず、女の月のけがれある

をば、別戸をつくりて、主の家にいることなし。そのほか、よ

つねはなほざりに打過することをも、此浦人はつゝしみて、かりに

も犯すことなし。さきに過こし志賀の鷲も同じならはし也。いつこ

も、みやこめきたる所は、人の心さかだらて、物いみなとするを

ば、厭なることにひあふめるを、かゝるひなびたる所には、かへ

りて古の風の残れるもの也。かゝるならはしも、神からならずや。

けふ御嶽にのぼりて、をちちらを見めぐらすに東は長門のしま／＼

よりはじめて、此國なる山鹿の岬、南には豊前の彦の山、北には

御笠郡なるかまと山、早良郡なる背嶺のみね、怡士郡の留難・浮岳、

同郡の姫しま、肥前松浦郡なる名瀬屋崎、同郡の平戸の島、若狭のし

ま、此國なる大蛇島、乾のかたに対馬見ゆ。瀬のしまはいつこそぞ、

と見れど見えず。北のかたは、九度何もみえず。猶いたき迄みる

に、辛くして浪のひまより見出だり。津しまの少し東の方に、嶽二

あるが、海の中よりもゝ角さし出しだらんが如し。おのが行へ

き鷲はあれにこそ、といふに、皆人肝ぎえたり。いかで一たびは御

又、
むなかたに、いつく祝部のゆふたすき
かくるもかしに神のむかしを
三日。猶同じところなり。沖つしまの神づかき河野ぬしがもとより、
来べきよしひおこせたり。打つれてゆく。醉られて、日の暮るを
もしらず遊ぶ。
四日。風波やむべくもあらず。いつか沖つしまには渡りねべき、と
のみいひあへり。浪のたつを見てよめるうだ。
（註）月ははくれしをわたつみのかさしの花はいと咲（そき）
とぞいへりける。

五日。浪風静なれば、船出せよ、といへど、花取港なる舟路にしあ
れば、追手のおりはず、いかで漕あへん、といふに、人々いたづら
に海原をながめつゝぞある。はかくしくもの語ふべき人もなけれ
ば、いと忙しくて、日々に、山にのぼり、磯に出づ、同じ所をと
ほる。沖津みやの遙宮にまるりて、
（註）角崎経岩瀬の磯に潮まつと波洞ふりたつる蟹の釣ふね

いつしかも見むとおもひしむなかたの
中津宮にまるりて、海の原安げく平げく、船泊しめ玉へとのみ事り、
御前よりまかるときに、
天の川々霧たちて劍たち宗像の神のむかしおもほゆ

にも鳴長立山^(なるながたてやま)、やどりに車でゆく。人々ともなり、山にのぼりて、福岡のかたをみれど、そこともなし。

わたつみも心あらん白浪の立さふへしやわきへのあたり
嶋のうしろの岸、浪の打入ところに、大なる嵐窟あり。十丈ばかり
(じゆうしよく)
(さかだち)

反歌

浪のよするもすさまし。沖より、(水手小舟)あまた漕つれ來て、ほどなく、里ちかき磯に網引(あひびき)す。舟をおし出で見にゆく。漁のかたなる海士(みまき)ども、舟の上に立わたり、手飄(ひぶき)してまふ。辺(へ)つかたなる(あご)等(ひと)幸(さい)あり、とのゝしきつゝ、諸声にひく。海の中てりわたり、(金をしけるが如し。(よだまき)式(しき)あまりの網の赤くてれ(るき)さわ／＼に引よせ挙て、二三ツ舟のうちに投入たり。人々めづらしもて、大なる(船)にうかべなどして遊ぶ。此嶋の名、書紀(くじき)の惠長足姫尊の御巻に、吾愛(わがこころ)と記されたるを、いつよりか、(あひ島)鳥島といへり。又、無題詩集には、阿思筑(あしむつき)と書り。此地に火々出見尊、豐玉姫命の御社あり。
海日(みょうじ)にはもしづけしとて、あへぎこぐ。嶋の東の海中に、离

五六丈もあらんと見えて、雄しだみなどの形したる岩あり。その中らに、大なる洞ありて、東より西にとほりたり。洞の中へは、小舟も入ぬべし。いとあやしき地也。

あべのしま 潟たみゆけば 青海に しろき浪たつ 蟻のわたま
かぐろ巣巣 わたつみの ちひろの底よ 奇しくも 高くたゞ
せり そのいはほ いはひととへる 細蝶子の 象なしつゝ

「万葉に
神さきをるか わたつみの 神の宮こそ 験なす や
かすは 有とへ しただみなす 御門もあらん その宮は安にま
しけり 其みかど 愛にましけり かしこけど 行てはやみん
わたの宮こそ

反歌

ありかよひ来(アリカヨヒカム) かく見むあ(アガフ) のしま鷦のすむ石による浪の如
鷗(カモメ) のさましたる大なる黒き鳥の、潮さるに浮居て魚をくぶ。見な
れぬ鳥なれば、舟人にとふ。だいといふ鳥也、とこたふ。柏取のむ
くづげるが、声づくりして、これなん海の医者國也といふに、皆
人たへやらず笑ふ。いと塵だちて、さな笑ひ給ひそ、其よしもしら
で、といふ。さらばそのよしかたりね、といふに、水鳥の病るが磯
にふしなどしおるを、此鳥来て、羽あるは尾なんど喉もち、ひこづ
らひて、遂にその病をいやす也、といふに、人々かまけてをれり。
名兒山(ナミコヤマ)。桂葉見(カエデミタ) つゝこぐ。けふも日くだるまゝに、浪高く、大鳴に
着ぬれば、風も吹出ぬ。鷦の岬(カモメノシタ)を見わたして、

らつ崎の西の海辺より船乘す。古言に心よせある人々、おひく、
おのがもたる本なんど錢してあたふ。(この)ひとく、せちにわか
れをしみ、幸く行て、さきく帰りて、ぬさとりむけてのみつゝをら
ん、たかくに待つゝあらん、といふに、

沖つ波ちへにたつともぬさまつり君しいのらばあにさはらめや
わだの原嶋のさきく努たゞば君がおきその風としもはむ

よみもはてぬに、船漕出たり。(いにしへの)防人等が、東の國より、
はろくと、溟渤をわたりて仕へまつりしまま、思ひ出られて、あ
はれにこそ。今かり初の旅だに、別るといへばかなしかりけり。此
船出する入海のさま、世にこえておもしろき地にしあれば、これの
年ごろ東に侍りて、又いつか見るべきなんどこひわたりしに、六と
せばかりを経て、けふしも来つれば、いとめづらし、と打見わたす
に、入江のくまと、いづこもおかしき中に、わきて打昇の浜のあり
さま、かしこき画工の筆にも書うつすべからずや。青き海に、いと
清らなるまさごの、榜領巾引はへたらんやうにて、今の道三里ばかり
づきける。あらん松原の、とほく抜けぶりたるなど、目もは
るべく也。後九条内大臣の、山までづく海の中道とよみ給ひしも、
この所にや。今は奈多の浜となんよめり。志賀島近くりければ、
(足姫神の)みことのいだましの御舟はてげん浦ちかづきぬ
とかする内に、西風ふきて、しら波たてば、あすこそとて船におり
てやどりす。嶋の長出向ひて、これ彼レものたらはしたり。此島に、

同善連等がいく底津少童・中津少童・表津少童三柱の皇神ます。

里の上なる御社に、底津わたつみの神を祭りて、餘の二柱を相殿
とす。又嶋の北一里ばかりに、勝間といふ里あり。其浜の松の林の
内に中津宮あり。中津少童命をまつる。其少し北の方、海の中に小
島あり。冲の明神といふ。表津少童神をいく。阿雲連の商は、
聖一國師につきて僧となれるよりそその家はたえにける。いま社

の側なる吉祥禪寺は、其僧の建おけるによりて、いまに到りて御社
につかへ奉る。猶神官の内には阿雲連と称され彼あり。神道のあた
りより、東の海づらを見放れば、香椎瀬の潮十のうら見わたされて
おもしろし。こなたの磯にはあま小舟多くつとひたり。

志賀の蟹小舟つらなへ放りそのありそのうへにたまもかる毎日。
也良の磯も近けれど、認こめたり。鶴亭はいづくぞといへど、心あ
てもみえす。

春霞たちかくしたりから泊のこのうら覗見てましものを
島の西のかたに、磯良崎とてあり。海の神のあがり玉ひし所也、と
なん里人いへり。

神さなる磯良が崎による貝をひりひてゆかん袖はぬるとも
廿九日。いまだ起もやらぬに、舟人、追手よし、とぞいふ。島漕そ
きて願れば、(きのふ)おぼほしかりし韓泊も。けふはよく見え渡り
たり。(底津)山山もほど近く見ゆ。けふは、宗像郡の大島ま
でとおもふ。渡たかれればとて、櫛屋那なる阿闍鳴(あやめ)とまる。こ

青柳種信著
平野國臣写 灘津島防人日記 上下二卷

平野次郎國臣ガ普請方ノ小役人ヲ務メ小金丸種徳ト名乗リ二十四
才(第水四年)ノ時、社殿修理ノ御用ヲ帶ビテ大島ニ出張ノ折、冲島
ニ渡航シテ滞在中青柳種信ノ防人日記ヲ写シテ奉納シタルガ本書デ
アル

【宗像】

例言

- 1、収録の防人日記は、多く変体假名で書かれているが、すべて現行の平假名で組みあげた。
- 2、誤字、脱字であるとの明らかなものは、すべて訂正をした。
- 3、言葉の右側に括弧して、読みまたは異字をつけ、読み易くした。
- 4、句読点をつけて通説に便ならしめた。
- 5、疑問の字句・文章は、原宏の内蔵文庫本『灘津島防人日記』による活字本(三一書房刊)を参照して補正した。

防人日記 上

青柳種信編錄

防人日記ノ事

防人日記ハ青柳種信が寛政六年二十九歳ノ春黒田家ヨリ差遣サル
ル警衛人数ノ一人トシテ渡航シテ暫ク勤務シタ時ノ紀行デ冲ノ島ノ
神格ト鎮座ノ由來ヲ公頌シタ長歌、在島中ノ感想、情景等ヲ述ベタ
数多ノ短歌モアリ文学的ノ著作トシテ頗ル興味ノ多イモノデアル

寛政(二十九年)六月としの弥生(四月)廿八日、宗像(郡)の灘津しまに、
さきもりにまかる。そのよしいきか物に書つく。此島は、國の北
のわた中通(通)さて、新羅(新羅)に近き島にしあれば、つねに防人を遣し
て守らせたまふ。此島を牛吐(牛吐)ます大神は、宗像の三柱の皇神(皇神)のうち、
一柱の大神におはします。神御威(神威)たゞはしくませば、旅だつべき
まへかたより、ゆまはり清まはりて、家の内をもはらひ、かりに
もけがらはしきことなからまくす。けふは首途なればとて、鳥飼(鳥飼)の
神づかさを招きて、はらへのわざなど語ふ。午時ばかりに、あ

桜井神社大宮司^{さくわいしんじゃだいぐうじ}、毎賛^{まいさん}が開設した「桜井文庫^{さくわいぶんこ}（御古蔵）」があった。

いま、その「御古館書籍奉納姓名録」（桜井・伊牟田区林吏社所蔵）を読むと、つぎのような記述が目につく。

この毎賛なしの預り司り玉へるかぎりのみや人ども（毎賛は筑前國中神職の惣司）の、物まなびのために、月ごとに書よみ、聞あきらむべき口をきはめおきて、必ずとひ来つつ勤めいそしむべくあらまほしきおもぶきを、ねぎ奉りしをさへに、（藩厅より）許し給はりしかば、すなはら、ひとびとをつとへて、この葉月（八月）廿日あまり八日といふに、この学びの道のおやどある青梅種信の翁、古事記の端ことば（序）を、よみとき玉ひて、開講の式いとるやるやしくことをはりぬ。云々

あるいは、平川千利伝写の原本は、この桜井文庫のものではなかつたか。実証はないが、思いつくままに記しておく。

ひまふ。浪風のおどろくしきにはやうかはりて、うつぱりの塵
もちろんばかりなり。

とあるが、種信が得た真の果報は、この沖ノ島在番中に第九代藩主

齊隆の詮議により、国学修行のための書籍購入費を受けることに決

して、いたし、この月の下旬には、家を地行四番町上に借り、ますます

国学の研究に精進することができるようになったことである。原宏
によつて紹介された内閣文庫本『瀬津島防人日記』下巻の末尾に、
「青柳種信 上」とある。この防人日記は、勤者の報告書ではなく、
藩主・藩主に対する国学「事始め」風土記的なものへの「事始め」

であったというべきであろう。

このような事情からいっても、防人日記は、もちろん、島での日々
の生活記録であるが、その記述は、帰宅と同時に完結したもので
なく、素述や備忘録を整理し、文章を推敲し、後日に完成し、上書
したものである。寛政九年（一七九七）六月廿六日付内山真龍宛種信
書簡には「三、沖津島日記近々の中送付添削を乞ふ」とあり、同年
十一月二十一日付種信宛宣長書簡には「一、おき津島日記下巻出来
申候はゞ御見せ可^レ被^レ下候」とある。なお春日政治は、「日記全巻
が出来上つたのは寛政十一年（一七九九）頃のやうであるから、多少
練つたものではあらう」と述べている。

小山正の『内山真龍の研究』に紹介されている真龍の日記によれ
ば、享和元年（一八〇一）十一月廿五日に、防人日記を、真龍が抄出

したらしいことが記されている。この年は前記寛政十一年の翌々年
にあたる。撰文のあった種信と真龍との関係からして、やはり防人
日記の完成まで、相当の年月をかけて推敲したものと思われる。

三、あとがき

おわりに、ここに紹介する「瀬津島防人日記」（上・下二巻）につ
いて、少々の考察を加えてみよう。この防人日記を謄写した人物は、
原宏は、平野國臣とする宗像大社の注記を、保留しているが、その
「貝殻の音も聞えず、島神の國ぶりしるき沖つしまかな」という和歌
の歌風、筆跡からみても、その保留は必要ないのではないかと思わ
れる。

この防人日記は、種信……桜井の平川千鶴→横の園ひろよし
→藤田正兼→小金丸種徳（國臣）といふ経路を経たものであるが、
正兼は、種信の国学の門弟であり、歌人として知られた人物で、そ
の遺跡に「縁の舍文集」「古野のづば
な」「部焚美礼」等があり、「筑前國統風土記拾遺」の完成に効力
のあつた協力者の一人である。

正兼は、奥書の「とし道・ひろよしともに誰人ともしらず」とし
ているが、「さくら井の平川千鶴」については、そのように書いて
いないので、あるいは知っていたのではないかとも思われる。志摩
郡の桜井には、種信の全面的な助力により、文政一三年（一八三〇）

追手なればとて、すこし心をのどめてるたりしを、申の時ばかりには大島つきぬ。

種信が、沖ノ島で敬神の誠をいたし、獻本・獻木をして、國学成就の祈願をこめた消息は、以上の抜萃によつて、その大略を知ることができよう。足輕だから勤番を命じられたものであるが、種信自身からすれば、かねての願望がかなえられたのであるから、これほど恵まれたことはなかつた訳である。

(三) 風土記的學風への事始め

防人日記の述作者青柳種信は、「古事記」「日本書紀」「古風土記」「万葉集」などの、古典の研鑽からはじめて、筑前の神社史の研究、その他古器物学についても、それぞれ勝れた業績を遺したものであるが、その最大著作は、なんといつても、「筑前國統風土記拾遺」である。この書物は、不幸にして、種信の在世中には成稿をみず、未完成であつて、その子長野種正・青柳種春・門人兒玉琢・坂田良質・藤田正兼により、やつと完成に近い程度にまとめられたものであるが、種信は、早くから、貝原益軒の「筑前國統風土記」について知悉していたろうし、その資性から、筑前はもとより、広く及ぶかぎりの諸地方の事物についても、歴史的考證・地理的觀察を加えつつ、これを総括的にのれの学殖・教養としたと思われる。そして、

そのような学殖と教養とをもつて、沖ノ島のみならず、大島・田島にかけての、いわゆる宗像三社に即して、これを記録化し、世のいわゆる風土記的著作の「事始め」にあたるものとして提示したもののが、本人が意識したか否かは別として、まさに、この防人日記である、といえよう。

もちろん、防人日記は、その名のとおり日記を主体としたものであるが、その内容には、地理あり、歴史あり、寺社あり、古物あり、民俗あり、しかも、その下巻の宗像神社所伝の古文書・古記録についての考證など、すでにして、種信の爾後の學風の主軸をなした、風土記的なものへの指向が、すでにして窺いみられるのである。そして、それは、この日記の末尾にして、

家に帰り着ぬ。庭をみれば、わがゆく時は、池の藤波のやゝ長く垂て、今日五六日ばかりも在まつたば、などおもひつゝ出立しき、其日頃絶えぬはわざがて成しを、今見れば、花の咲きつらんとおぼゆるさまもなくて、下葉のやゝ色付にける、わづか四月・五月のほどに、春と秋とのうらうへなる世のあります、あまたの年経たらんやうになもおもはる。されども、家の内は、うからやからつどひて、いとにきびにしかば、かたみによろこびあへる。いろせに見すとて

秋くれば草はみなからうつろへと吾背の君はいやさかえます
ちかきあたりの人など訪ひ来る。亞とりかはして、更行までうた

は これの葉の とこしきが如 これの実のかぐはしきこと

万代に さかえをゆかん 皇神の 御魂たばりて ちはひ給は
ね

反歌

時じくのかぐのこの実をまつり置て我もあえてんそのとこしき
に

10 級四辺のいぶきしづけられば韓人のよりくとふ事もなく、手む

だきをれば、防人等は、ひたすらに神につかふる人の如く、朝夕
に御前に落ちたりたる木葉をはらひ、石をしきなどしてつかへま
る。神山の内に入には、つねに声とゞろかしてゆく。もし、ひそ
かにゆけば、神の遊び玉ふにゆきあふといひ伝へたり。

11 此嶋の大神いたく汚穢を忌玉ふに依て、山中にてかりにも睡。
少便ることなし。もし過ちてけがす時は、其地の土をくひ、海
に持出で、磯に捨て、清き砂を、先の土取し跡に埋みて、本の如
ならしおく。是を犯してしかせざれば、怒狂亂などする。近頃に
もさる人ありて、誰もよくしれることぞなし。さるべき設にて、
昨日より大なる竹筒作り置て、締して腰に付つゝのばる。

12 脣國の人此島を見つけて不、言島と云。そは神異のことあるを

ば家にかへりて人にいはぬよしの名なり。

13 埼守にある日數もやうやく立ねば、ばかりの舟やくると、日々

に山に登りて、南の海づらを詠つゝあり、辰洞なども、やうやく、
いひあやまたずなりぬ。

14 人のからきめみるにつけ、帰るさのほど心もとなくなん。後に

舟人の語るをきけば、大島に風守りせしほど、いささか触穢のこ
と有し、これをや海の咎め玉ひけんと乞いふ。いとかしこくな。

15 同廿四日、庭よしとて舟出す。二三里もや来ぬらんとおぼしき
に、風あしことて、又本の如く漕つれて帰りぬ。

同廿五日。なごり高しとて舟出だす。

同廿八日。風かなひぬれど、舟子どもさきにこりて、いざとて
舟出する者もなし。

同廿九日。曉がたより、艮の風心よく吹度りて、海の面もなぎ
たり。舟人ら猶たゆたひしを、巳の時近くなりてなも、舟を出せ
ば、なほ日ごろは海岸の住居にわびて、帰るべき日をのみかぞへ
たりしを、今はと出たつには、さすがになごりをしまるゝ心らず。
海つ路五里ばかりも來ぬらんとおもふほどより、風はやく強く吹
しきりて、浪の華を咲そふばかり也。續より懸浪うちいるれども、

しら浪のやへをるがうへにあやしくもいます神かも沖つ御島は
磯おりて、海の平けかりしを互に悦びあへり。神司は懸壁の
下なる磯にいほりし、惡こもらず。

6 此鷦に来る例^{めい}。七日の間朝ごとに潮にみそきて、その間山中に
入ことなし。七日に當る日には、正三位^{吉田の神を}にまるりて、八日
に大神の宮にまるる。毎朝海水を浴て正三位社にまるることは、
大神の宮には、つねはみだりに参らず。神威を恐れて也。
其後もかはることなし。

7 神づかさの語^ごによりて、神代卷^{日本書紀}をよむ。又、おのれ
上代の学びのことと祈事^{こと}とを祈事^{こと}と、ふりはへて思ひ来しかば、祈の
御手ぐらにて、豐後國風土記と、延喜式の大祓の考とを写して
奉る。

8 (四月) 十六日、大神の宮にまるるとて、まず正三位の社にぬ
かづく。岩さきのさし出たるところに御社あり。(中略) 正三位社
より坂路五六丁ばかり登り行ほど、日のめもみえぬ迄木立しげれ
り。宮地は一の巣の篭、大なる巣の物の足のごとく三ツ巣たるは
さまにおはします。いと神さび、心すき所也。をろがみまつり
て、のりとをさゝぐ。

9 (四月) 十七日。おのが家に在し櫻樹をもてまるりしを、
御前にうとて、そてたてまつる哥
霜おけどいや常葉なる ことよもの あへたらばな ほつ枝に
白和解かけ しづ枝に 青にぎてかけ はるくに いこじま
りて かしこきや 神の御前に ほりうゑて のみまつらく

宗像の郡の瀬津しまに、さきもりにまかる。そのよしいささか物に書きつく。

2 此島を手吐ます大神は、宗像の三柱の星神のうち、一柱の大神におはします。神御靈威たゞはしくませば、旅だつべきまへつかたりより、ゆまはり清まはりて、家の内をもはらひ、かりにもけがらはしきことなからまくす。けふは首途なればとて、鳥嶋の社の神づかさを招きて、はらへのわざなど語ふ。(中略)古言に心よせある人々、おひくおのがもたる本なんど餓してあたふ。

3 四月朔日、同じ所(大島)なり。瀬津しまにわたる人々、愛より、朝ごとに海に入て身そます。そもそも此浦は、いつしき皇神の静まりますけにや、人ごとに、物いはひして、けがらはしきことを、いたく感はざかる。身まかりたるをいむはさらにもいはず、女の月のけがれあるをば、別戸をつくりて、主の家にいることなし。そのほか、よのづねはなはざりに打過すことを、此浦人はつゝみて、かりにも犯すことなし。(中略)いづとも、みやこめきたる所は、人の心さかしだちて、物いみなどするをば、厭なることいひあふめるを、かゝるひなびたる所には、かへりて古の風の残れるもの也。

4 瀬のしまはいづこそ、と見れど見えず。北のかたは、九で何もみえず。猶めいたき透みるに、辛くして波のひまより見出たり。瀬のしまの少し東の方に、嶽二あるが、海の中よりものゝ角さし出したらんが如し。「おのが行べき船はあれにこそ」といふに、皆人肝ぎえたり。いかで、たびは御嶋にまわりてしかな。と心にねぎしかど。いまかくものすべしとは思ひかけざりし。いとたふとくて、遙にをろがみまつりて。

5 「いざ、よそひたせよ、われ(神主河野氏)も共に舟出せん」とて漕出たり。神中(海の途中)に行ける時、手向すとて、苦海原神のみなにぬさまつり幸くもがもとひのむわれは左り右見めぐらせど、向伏雲のみ也。あへて漕出し七の舟は、木葉のうきたらんよりもひさし。浪のたつとはあらねど、大海のゆらふに、人々心あしみ(船聲)して、かしらを舟費にあてゝ、物をもえいはず。舟子どもは、「神の御心にかなひ玉へる人々にこそあらめ。年ごとに行かへども、かゝるしづけき海をわたりし折なんなき」とぞいふ。近づくまにく仰ぎみれば、其さまいとあやしくて、他国に漂着たる心して、天皇の所食国内ともおもはえず。

又眞翻をも祖師として常に追慕はしてゐたが、歌は眞翻に比してたとひ氣調に乏しい感はあるが、格調がより醇であつた。この点に於てはむしろ（平賀）元義などに迫るものがあるが、惜しいかな氣魄に欠けてゐる。寛政九年に同門の近藤春彦が長崎に下る途次、翁を訪ねて來た時の事を、其の「四方賓客來訪」といふ備忘の稿に記して

翁屋翁（宣長）の門人のよし哥を尊として諸国を遊すれども其

歌も未熟にして殊に古言をしらず浅学といふべし

と言つてゐる。當時三十二歳の翁が、四十余年（翁自ら記してある）の春彦に対しても評したのは、學問に於て作歌に於て如何に自信してゐたかが分ると同時に、和歌は古言を以て讀むものとしてゐる信条がよく表われている。實に此の時代には未だ形を主とする人が多かつたのだ。翁は頭が余り古典研究に頗る過ぎ、常に考証的思考に向つてゐて、要するに内容に清新味が欠け、詩趣に乏しかつたことは事実である（黒島春策）。しかし鉢巻門下としてはその學問と共に作歌も一二に伍する事が出来る。翁の性格は大半が温和篤実なる人物と言つてゐるやうに、其の肖像画を見ても面容極めて温雅の人と思はれるが、其の割合に歌口に歌才があり、かつ氣力があるものと言ふべきであらう。而も九州に於ては重きをなす人、殊にあの時代に古風を説いた一人者であらうと思ふ。若し翁をして永く江戸に在らしめ、新古その一方で徹底せし

めたらば、更に進境を見て歌人として名をなしたかも知れないと思ふのである。
と詳述している。このような点からみても、種信にとって、この防人日記が、その歌人的生涯にとっての記念塔ともいべき重要性をもつてゐるといえよう。

〔二〕 国学者種信としての渡島

「本論の一」では、種信の万葉的素養のただならぬことを、春日政治の立言にしたがつて、あらあら実検しちつた。防人日記の基調に、古事記・日本書紀をはじめ、いわゆる國学的な學殖の広く深く存することは、この日記をすこし丹念に読みすんでみたら、何人にも感得される事実であろう。この「本論の二」では、実は、この防人日記こそ、そのような學殖に自信をもつた種信が、六か年にわたる江戸生活の間に蓄積した學力のほどを、わが郷土において、実証しようとして、いみじくも見事に成功した業績であり、しかもなお、そのことを、冲ノ島——宗像三神の神長にかなうものとして、信仰的な色彩をこめて綴つたもので、柳隱園学の出発宣言にひとしい文献であることを、種信の日記の文章の抽出によつて証明してみたい。

かづき得てわれに得しめよ大窓の水庭でらしきづくしら玉

わたつみの神の鏡やたえぬらん波同に拾ふあはみしらたま

註四五 吾はもや

○われはもや安見兒得たり告人の得がてにすとふ白玉得たり

二・九五

吾はもや白玉得たり告人の得がてにすとふ安見兒得たり……

防人日記における種信の万葉的歌風の検討は、これで一応終ることにするが、この歌風についての春日政治の説を読んでみよう。

○彦星と織女と今夜逢ふ天の河門に波立つなゆめ……

一〇・二〇四〇

○萬葉する時になるらし月人の楓の枝の色づく見れば……

一〇・二一〇一

○月人のあまの河とを船出していつことまりとさしていくらん

註四七 しかしけらしも

○天地の共に久しく言ひ継げと此の奇魂敷かしけらしも……

五・八一四

註五〇 塩焼衣・和布刈塩やき

○志可の商人は薺刈り塩焼き眼なみ麿マツリの小繩取りも見なくに……

三・二七八

〔以上・下巻〕

桜園集には寛政四年二十七歳の頃からの詩が載つてゐるから、防人日記の歌は翁としては初期と見てよいのであるが、江戸に於て万葉集を研究した直後ではあり、未だ妻帯もない壯年である（翁は三十三歳にして始めて久野氏を娶った）、殊に沖島御番といふ境遇が妙であつて、十分防人気分になることが出来たであらう。而も越えてが実境に臨んだ実感から湧出でる（羅点氣氛）。翁も寛政十一年頃には、歌について宣長から注意を受けてゐることが、現存の宣長からの手紙でも知れるが、さうした時の方が、堂々たる先生になつてむやみに題詠をしたり、他人に乞はれて強ひて作つたりする歌よりも諷刺としてる苦である。翁の歌が新古を並べ詠んだのは、もとは宣長に倣つたのかも知れないが、彼の古風だけは自分の万葉研究から自然に進り出て来らしく、徒らに宣長に模した跡は見えない。寧ろ師に譲らざる生氣が表れてゐる。

○わが背子をな越しの山の呼子鳥君呼びかへせ夜の更けなども……

一〇・一八二二
一〇・一〇四六

○答へぬにな呼び尋めそ呼子鳥佐保の山辺を上り下りに……

一〇・一八二八

○朝霞八重山越えて呼子鳥鳴きや故が来る屋戸もあらなくに……

一〇・一九四一

木のくれ嘘たどきもしらにおほほしく我行道にたれよぶこ島

註三九 角鳴（長門國）

○角鳥の追門の稚海藻は人のむだ荒かりしかどわがむたは和海藻……

一六・三八七一

秋の野の萩ふみしだき喝く鹿のつづく角鳴浪より見ゆ

註四〇 百ふねの津しま

○百船の泊つる対馬の浅茅山時雨の雨にもみたひにけり……

一五・三六九七

しらぎべにタ立すらし百ふねの津しまのねろゆ響むたちくも

〔以上・上巻〕

註四一 石網

註四二 拝角のしらぎの國

○特異の新羅の國ゆ人言をよしと聞して……

三・四六〇（長歌）

みる夢のかたりにせんを拜角のしらぎの國に愛なたなびき

註四三 雷連

○右の一首は、雪毛麿のなり。〔左記〕……一五・三六四四

○〔通新羅使人〕老波の島に到て、雷連毛麿の忽に鬼病に罹り死去りし時に作る歌一首（題詞）一五・三六八八

註四四 しやく白玉

○海の底しづく白玉風吹きて海は荒るとも取らずは止まじ……

七・一三一七

しらぎべにタ立すらし百ふねの津しまのねろゆ響むたちくも

〔以上・上巻〕

○淡海の海沈着く白玉知らずして恋せしよりは今こそ益れ……

一一・三四四五

○古ゆ人の言ひける老人の妻若つとふ水そ名に負ふ瀧の瀧

○月説の持てる妻若水 い取り來て 君に奉りて 妻若待しむも

の……一三・三二四五（長歌）

おひ人のわかゆとふ水ぞ沖つしまりその岩井いざむすびてな

註三三 黄金花咲く 註三四 走井

○天皇の御代栄えむと東なる陸奥山に黄金花咲く……

一八・四〇九七

○蒸ら波走井の水の清くあればおきてはわれは去きかてぬかも…

…七・一二七

目かがやくこがね花さく岩のまゆいつる走井のむはよしも

はしりゐの水底さへにてるまでに五百箇岩むらにくかねかがよぶ

註三五 岩根さくみて

○大鳥の羽扇の山に わが恋ふる 妹は座すと 人の言へば 石

根さくみて なづみ來し……一・二二〇（長歌）

五ちはふ神につかふと守は岩ねさくみてけふもまるです

註三六 高々にまつ

○白雲のたなびく山の高高にわが思ふ妹を見むよしもがも……

四・七五八

○石上布留の葛籠高々に妹が待つらむ夜そ更けにける……

一二・二九九七

○農國の企救の高兵高高に君待つ夜らはさ夜ふけにけり……

一三・三三三七

○母父も妻も子どもも高高に来むと待ちけむ人の想しき……

一三・三三三七

高々にまつ音をおきて深山べに鳴くべきものかしにほとどぎす

註三七 かほ鳥の声

○春日を 春日の山の 高座の 三笠の山に 朝さらす 雪るたな

びき 容鳥の 間なく數鳴く……三・三七二（長歌）

○春にしなれば 春日山 三笠の野辺に 桜花 木の曉こもり 育

鳥は 間なく數鳴く……六・一〇四五（長歌）

○貌鳥の間無く數鳴く春の野の草根の聲き恋もするかも……

一〇・一八九八

註三八 よぶこ鳥

○神名火の伊波瀬の社の呼子鳥いたくな鳴きそわが恋まさる……

八・一四一九

八・一四四七

○つのはさはふ繁余も過ぎず泊瀬山何時かも越えむ夜は更けにつつ…

…三・二八二

○つのはさはふ石村の山に白拂に歸れる葉はわが大君かも…

一三・三三三一五

註二八 かしふりたつる

○舟泊て戦洞振り立て廻せむ名子江の浜邊過ぎかてぬかも…

七・一九〇

○大船に戦洞振り立て浜清き麻呂布の浦にやどりかぬまし…

一五・三六三二

○青波に袖さへ濡れて漕ぐ船の戦洞振る程にさ夜更けなむか…

二〇・四三一三

角障絆岩瀬の磯に廻まつと戦洞ぶりたつる葉の約ふね

註二九 橋。いや常葉

○橋は実さへ花さへその葉さへ枝に霜隠れどいや常葉の樹…

六・一〇〇九

註三〇 橋

○橋の成れるその実は直照りに跡見が欲しくみ雪隠る冬に到れば霜隠けどもその葉も枯れず常葉なすいや栄映え

註三一 わかゆとふ水

○わが袂まがむと思はむ大夫は麥水求め白髮生ひにたり…

四・六二七

○橋は花にも実にも見つれどもいや時じくになほし見が欲し…
一八・四一二
木の実と名づけらしも…一八・四二一（長歌）

反歌一首

○橋は花にも実にも見つれどもいや時じくになほし見が欲し…
一八・四一二
白和帶かけしづ枝に青にぎてかけはろくにいこじまる
りてかしこきや神の御前にほりうみてのみまつらくはこの
れの葉のとこしきが如これの実のかくはしきこと万代に
さかえをゆかん
反歌

時じくのかぐのこの実をまつり置て我もあるえてんそのとこしきに

註三一 福草（三枝）の

○夕星のタになればいざ寝よと手を拂はり父母も上は勿下
り三枝の中にを寝むと…五・九〇四（長歌）
こゝしかかも岩の神さび福草のみかみの縁に寝るたなびく

まより大しまのへに我をれば雖のみさきにしら瀧たつも

○坂越えて安倍の田の面に居る鶴のともしき君は明日さへもかる
一四・三五二三

註二二 天の安河内

○天照らす 神の御代より 安の河内 中に隔てて 向ひ立ち 袖振
り交し……一八・四一二五（長歌）

註二三 神がら

○玉藻よし 講岐の國は 固柄か 見れども飽かぬ 神柄か ここ
だ貴き……一・二二一〇（長歌）

○み吉野の 嫁姑の宮は 神柄か 貴くあるらむ 固柄か 見が欲
しからむ……六・九〇七（長歌）

○神柄か見が欲しからむみ吉野の魂の河内は見れど飽かぬかも……
六・九一〇

註二四 桦弓はる

○蠟蛇島 日本の國は 神からと 言舉せぬ國 然れども われは
団舉す……一三・三三五〇（長歌）

○立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし……
一七・四〇〇一

註二五 ゆふたすき

○わが屋戸に 御諸を立て 枕辺に 斎鑿をすゑ 竹玉を間
なく 買き垂り 木縄拂 かひなに懸けて……
三・四二一〇（長歌）

○木縄拂 扇に取り懸け 斎鑿を 斎鑿をすゑ 竹玉を
そわが祈む 基も為方無み……一三・三三八八
むなかたにいつく祝部のゆふたすきかくるもかし「神のむかしを

桦弓はるはれしをわたつみのかなしの花はいと咲そふ
一〇・一八二九

註二六 桦弓はるは

○梓弓 春山近く家居れば絶ぎて聞くらむ鶯のこゑ……

桦弓はるはれしをわたつみのかなしの花はいと咲そふ
一〇・一八二九

註二七 角鹿経岩類

○いのとはふ 石見の海の 言さへく 韓の崎なる 海石にそ……
二・一三五（長歌）

註二八 ともしさ

○味こり あやにともしき 高照らす 日の皇子……

一一・一六二（長歌）

註一五

立さく。

○要るや
神の渡は
立たぬ
とる波の
わたつみも心あらん白浪の立さふべしやわきへのあたり

註一六 滑たみゆけば

一・五八

○何處にか船泊てすらむ安礼の鷲滑ぎ廻み行きし棚無小舟……
○磯の崎滑ぎ廻み行けば近江の海八十の湊に船多に喰く……

註一七 姉のわだかぐろき

三・一七三

○海の底神は恐し磯廻より滑ぎ廻み行かせ月は経ぬとも

註一八 細繩子

三・一七三

○にはひよる 子らが同年輩には 姉の纏・か黒き髪を ま構もち

註一九 わたつみの神の言

一・五八

○香島神の 机の島の小繩子を い拾ひ持ち来て 石以ち 突破り

註二〇 名見山

三・一七三

○にはひよる 子らが同年輩には 姉の纏・か黒き髪を ま構もち

註二一 錦のみさき

七・一三三〇

○細繩子(古事記の教説にもある)

○香島神の 机の島の小繩子を い拾ひ持ち来て 石以ち 突破り

……一六・三七八〇(長歌)

註一九 わたつみの神の言

○常世に至り 海若の 神の宮の 内の重の 妙なる殿に 携はり
二人入り居て 老いもせず 死にもせずして 永き世を ありけ
るものを……九・一七四〇(長歌)

○あべのしま 滑たみゆけば 青瀬に しろき浪たつ 雄のわた
かぐろき廻 わたつみの ちひろの庭ゆ 奇しくも 高くたゞせ
り そのいはほ いはひとへる 細繩子の 豊なしつゝ 万世
に 神さびをるか わたつみの 神の言こそ 順なす やかすは
有とへ しただみなす御門もあらん その宮は 愛にましきり
其みかど 愛にましきり かしこけど 行ではやみん わたの宮
こそ

反歌

なりかよひ來乍かく見むあへのしま鰐のすむ石による波の如

註二〇 名見山

三・一七三

○大波少彦名の 神こそは 名づけ始めめ 名のみを 名見山

と負ひて わが恋の 千重の一重も 懸めなくに……六・九六三

○ちはやぶる金の網を過ぎぬともわれは 恋れじ志賀の皇神……

○砦の崎^{ハシマ} 荒き波^{ハリカニ} 風に遇はせず 惡無く^{アツムク} 病あらせす^{アラセス} 急けく^{アシケク}

遠し馬はね……八十氏人の 手向する^{ハタハシム} 恋の坂^{ハシ}に 布奉り^{ハフツリ} われ
はぞ退る^{アザムク} 遠き土佐道を……六・一〇二三（長歌）

○荒津の海^{アツヅノミ} われ幣奉り^{ハフツリ} 斎ひてむ早暁^{ハヤカ}りませ面凌^{ハラカハ}りせす……

一一・三二一七

浦つ渡ちへにたつともぬさまつり君^{ヒカル}いのらばあにさはらめや

註二 息噭^{オモキ}の風^{カキ}

○大野山雲立ち渡るわが嘆く息噭の風に翳立わだる……

五・七九九

わたの原岐^{ハラシ}のさきく^{ハタ}零たば君^{ヒカル}がおきその風^{カキ}としもはむ

註四 防人等が東の國よりはるゝと演説をわたりて仕へまつり

しきま ○卷二〇に、時の兵部少輔大伴家持の長短歌を含めて一〇六首、

卷一四に五首ほどある。

註五 植領印^{ハシマ}はへたらんやうにて
○植領印の懸けまく欲しき妹が名をこの勢の山に懸けばいかにあら
む……三・二八五

註八 志賀の蟹^{カニ}

○然の海人は蒸^{シテ}刈^{ハサフ}鹽^{シハラ}燒^{シヤウ}暖^{シタマ}み髪梳^{カブシ}の小櫛^{ココリ}取りも見なくに……

三・二七八

○細領巾^{ハシマ}の驚坂山^{ハラカマヤマ}の白浜^{シロハマ}波^{ハマ}われにほはね妹^{ハナ}示^{ハシメ}さむ……

九・一六九四

○細領巾^{ハシマ}の白浜^{シロハマ}波^{ハマ}の寄りも肯へず荒ぶる妹^{ハルム}に恋ひつそ居る……

一一・二八二二

○かへらまに君こそわれに細領巾^{ハシマ}の白浜^{シロハマ}波^{ハマ}に寄る時^モも無^{ナシ}き……

一一・二八二三

註六 足姫^{ハタシマ}。神のみこと

○歎まくは あやに畏^{ヨシ}し 足日女^{ハタヒメ} 神の命^{カミミコト} 神國^{カミクニ}を 向け平げて…

…五・八一三（長歌）

○足姫御船泊^{ハタシマミタハシタ}てけむ松浦^{マツブ}の海妹^{シマツメ}が待つべき月は経^{ハシ}につ^フ……

一五・三六八五

足姫御のみことのいでましの御舟^{ハタシマミタハシタ}はてけむ浦^{ハマ}ちかつきぬ

註七 香椎湖潮^{カシマコシ}十の浦^{ハマ}

○時^{ハタハシ}風吹くくなりぬ香椎湖潮^{カシマコシ}の浦^{ハマ}に玉藻刈^{ハタハシ}りてな……

六・九五八

之進殿三百石御下の士也。助教大人始は田安中納言（宗武）殿へ仕へ、御用人を勤め給ひ、野田帯刀殿といひける。今は退隱なり。此ねし厚く親み給ひて、県居翁の著給る書種々万葉集全部の考等を伝へ給ひ、且賀茂大人の秘置れし齊明紀の寫語の解をも自ら写して授られき。五年六年が間此の大人の恩もまた広大也といふべし。

以て其の事情の一斑を窺ふことが出来る。

2 翁の江戸に出て諸成と往来するやうになつた当初から、此の考（真新の万葉考）を写し始めたものであつて、いち早く万葉集の研究に従事したことが知られる。

前記の年譜に県居翁の著給へる書種々万葉全部の考等伝へ給ひ……

とあるのに思ひ合せられる。校本万葉集の解説に於けると諸成から借りて考を写し、かつ私案の書人をしたとの奥書が寛政五年まではあるのを見ると、江戸在役中万葉研究をやつてゐたらしく見える。翁は翌寛政六年二月には福岡に着つて、三月から八月まで沖縄御番を命ぜられて、彼の島に渡り有名な防人日記をものしてゐるが、其の中の歌に盛に万葉語を用ゐる萬葉調を行つてゐる（腹点氣嚙のであつて、作歌によつて其の造詣がわかると言つたのはこれである。

いまこの先学、春日政治の見解を、防人日記の歌文の実際について、検討を加えてみるとする。

そこで、まず、防人日記の本文・歌詞を通じて註の番号を附し、その言葉と万葉集の実例とを併記する。肉太の活字の歌は、種信の作である。なお、万葉歌は岩波書店「日本古典文学大系」本「万葉集」の「訓み下し文」によつた。（註の番号は本文についている）

註一 此島を牛吐きます大神
○海原の辺にも奥にも 神づまり願き坐す 諸の大御神たちら……
五・八四九（長歌）

○住吉の現人神 船の舳に 領き給ひ 著き給はむ 島の崎崎寄り脇はむ 磨の崎崎……六・一〇二〇（長歌）

○（鷦の住む筑波の山）……この山を 領く神の昔より禁めぬ行事ぞ 今日のみは……九・一七五九（曼歌）

○懸けまくの ゆゆしき表き 住吉の わが大御神 船の舳に 領き坐し……一九・四二四

註二 ぬさとりむけて・ぬさまつり

○ありねよし対馬の渡り海中に幣取り向けて早帰り来ね……

と下巻末に奥書きしている防人日記を用いたことにした。原宏は、如上の引用文中に「自筆・異筆の識別はいまのところ断定しえない」としているが、最巻末の余白に認めてある。

貝塚の音も聞えず星神の國なりしるき沖しまかな

の歌風・文字からはじめて、上下全巻、多少の誤字・脱字はあるにしても、まず、国臣の写本に相違ないところである。原宏が底本に用いた内閣文庫本は、善本としてすでに公刊されているので、それと彼此参考することも益なしとしないし、他方、勤王家国臣もまた、歎人として、国学者としての勝れた一面をもった人物であり、その二四才の年に、すでに世上に有名であったこの防人日記を、藤田正兼本から筆写したことは、それ自体に意義のあることであり、さらには國臣が、その師青柳種春を通じて、その父親である種信に対する私淑のほども、この写本によって窺いしられるように思われる。

二、本論

(一) 防人日記と種信の歌風

前掲の原宏の解説²において、彼は種信の防人日記の文章を評価し、

自作を含めて五〇首に余る短歌・長歌を載せた格調高い国文は、種信の面目を躍如たらしめる名著であり、早くから世に知られて

いた（園点筑紫）。

とした。このような種信の国学者としての学殖というか、万葉的素養のただならぬものが、この防人日記にも顯著であることを明言し、すんでん種信と江戸の万葉学者野田助教（諸成）との密接な関係に触れたのは、九大名譽教授故春日政治であった。

春日政治の『青柳集』（若波書店、昭和一四年刊）の「青柳種信の事ども」の一編は、種信のみならずこの両者のあいだにおける、万葉学的なかかわりあいを、かなり詳述していく、参考となるところが多い。まず曰く、

1 稲（種信）の万葉集に造詣の深かったことは、最もよく其作歌に表れてゐる。而も比較的早い時代の作から其の跡が著しいのである。其の江戸に在る間は常に野田諸成に就いて其の説を聴いてゐた。殊に万葉集に關する修業は多く諸成から得てゐるものと言つてよいやうである（園点筑紫）。今此等の關係を見る為には、翁自記の年譜（筑紫著、昭和二〇年戰火により、県立図書館にて焼失）を借るのが最も好いと思う。

富政元年己酉三月八日同僚十八人と共に江戸邸に宿直す勝次
年二十四
(中略)

四月江戸に着桜田邸に直す。今年江府古学の士を尋訪て野田大人助教殿に謁す。県居翁（賀茂真淵）の門人、子息は野田富

らぬほど、厄介な神ノ島である。

金島は、対馬灘流に洗われてるので、亜熱帯植物に掩われております。オオミズナギ島（うがち）・アブ・カ・ヤマヒルなどが生息している。ネズミは、多分そこに営まれてきた人間生活につれて、上陸し寄食し繁殖したものであろう。なお、ヘビは見かけなかつたし、住んでいないということである。

2 種信の「防人日記」は、寛政六年三月二十八日福岡をたら、四月九日に沖ノ島に着き、とどまる三ヶ月余にして、七月二十九日同島出発、八月四日福岡帰着に至るまでの紀行であるが、優に地誌・探検記でさえもある。自作を含めて五〇首に余る短歌・長歌を載せた格調高い國文は、種信の面目を躍如たらしめる名著であり、早くから世に知られた（國立東洋文庫）。したがって写本も多く、「国書目録」（岩波書店）に登載するものだけでも、内閣、東博・（安政二写）・九大（天保四写）・京大・国学院大（享和二年）・東大・福岡・多和などがあり、版本は東大・活字本は宗像郡志下巻（昭和七）と明治三十三年刊の一書がある。このうち「福岡」は昭和六年の目録にあって戦災で焼失した福岡図書館本と思われるが、このほかに現在宗像神社所蔵の嘉永四年の写本がある。表紙に平野国臣自写と書かれていて、けれども、自筆・異筆の識別はいまのところ断定しえない。明治三十三年刊の活字本を別とすれば、

宗像郡志本は比較的近時の上梓にかかるものであるが、なにぶん地方の郡誌であつて江湖の要望に応ぜられないこと、また脇落や誤植も多く、復刻に用いた底本の典拠が明示されていないことが惜しまれる。

このたびの底本に用いた内閣文庫本「源津島防人日記」は、上巻の巻首に「教育部文庫印」・「図書局文庫」・「日本政府圖書」と三個の蔵書印を押すものであるが、かなりの善本であるといつてよい。上巻の巻末に肥前「兼父牛原邑四阿屋敷」（現在佐賀県鳥栖市四阿屋）の三橋五百秋が、文化八年（一八一）に種信の原本を譲りて書写したと自署している。文化八年といえば、寛政六年から一七年たつているが、諸本のうちでは原著に比較的近い时刻のものである。

三橋氏については、伊藤常足が「太宰管内志」（肥前之一）で、宗像神社文書に出る東風六所権現（東風明神）を説くにあたって、「我友三橋氏東風神社の神官なり」「其祠宮三橋真國語れりき」と書いている。

以上、原宏の解説を多としながらも、わたしは、この紀要に、あえて宗像神社所蔵本、平野國臣がまだ養子として小金丸家にあつた時代に

大森善左衛門藏

皆田藤大夫殿

原吉蔵殿

沢木五郎右衛門殿

天保十二年丑五月十五日

佐野七平
古賀齊吉
野田恵八

種信が神ノ島に勧善した寛政年間は、この書類に見える明和と天保兩年の中間にあたっているので、島での種信らの身辺に遭し置かれた公的な裝備・陣營具は、やはりこんなものであつたろう。もちろん、種信はこのような事実は、承知のうえで渡島したものと思われるが、いま、注意をして、防人日記の冒頭の一文を読んでみると寛政の六とせといふとしの弥生の廿八日、京像の郡の瀬津しまに、さきもりにかかる。そのよし、いさか、物に書つく。

と記しているのであって、この勧善には、微禄足輕の身分を超えた、國学者青柳種信としての自意識が、つよく働いていることをすでに感じずにはおれない。

ところで、防人日記については、一九六九年（昭和四四）に、三一書房が刊行した「日本庶民生活史料集」第二卷に、原宏が綴つた、すぐれて詳しい解題と注記がある。読者にとって好文獻であるので長文をいとわず便宜上番号をつけて引用する。

1 福岡県宗像郡玄海町の神ノ島を北西に隔たること六〇キロ、

玄海灘のただ中に浮かぶ周囲四キロの孤島沖ノ島は、切り立った

絶壁で取り囲まれて深海に臨んでいる。島そのものが宗像三女神

の一つを祀る「神の島」（神域）であり、今なお神聖・禁忌が持守

されている。江戸時代には、大きな祭りの時期を春秋と決めても

日を定めなかつたこと、大島に遙拝所を設けていたことが、きび

しい地理的環境を物語つている。大正十五年十月に「沖ノ島原始

林」として天然記念物に指定された。沖ノ島は古来「不言島」と

も呼ばれて、島のことは語らない。一本一草たりとも持ち出さな

いことになっているが、この秘境沖ノ島が特に世間の注目を広く

あびるようになつたのは、昭和二十九年五月に始まつた「沖ノ島

遺跡調査」（宗教神社神津宮祭祀遺跡調査）以後のことである。しか

し渡航・帰航の日時を予定しても天候次第で意のどくならない

のは、昔も今も変わりはない。

筆者（筑紫）は、昭和二年夏に初度、右の二九年以降の調査その他に關係して渡島すること四回、大島かぎりで中止すること一回、神ノ島で風待数日に及ぶも渡海かなわず中止すること一回であつたが、無事渡海といつても、沖ノ途中で風浪に翻弄されたこと二回。大型の船舶で、島には近づけても、最後のハシケが使えねば空しく引還すこともあるといった難儀な渡航もあることを覚悟しておかねばな

福岡藩の「年表」によると、沖ノ島にはじめて番人を置いたのは

は、寛永六年（一六二九）のことである。延宝九年（一六八一）の

改めによると、「宗像那沖島（足輕加子百日交代、邊見番所無、御船

二、伝通）」ある。これでは人員が分らないが、貝原益軒の『筑前

國統風土記』によれば「足輕三人、水主四人、大島より役夫二人、

凡九人かはる／＼来る。五十日を以て限とす。送りの舟は大島よ

り二艘出す」とある（日限は後に百日と改められている）。この天保写

しの記録の文字を見ると、足軽らしいなどといえば、語弊がある

が、稚拙さがある。そこにはかえって、そうした低い身分の人達の

嘗めた労苦のほどが感じられる。當時、青柳種信は、すでに、ひ

とかどの国学者となっていたのであるが、その役務は、一般的の足

軽並みであったことはいうまでもないことである。あれこれ考え

ながら、この表紙とも五丁の書類を読んでみると、江戸時代における足軽の生活のわびしさがしみじみと想いやられるのである。い

ま、読方のむつかしい字には読み仮名を施し、意味の分りにくい

言葉には小註を加えて、全文を載せることにする。

（表紙）

沖ノ島御番所江、遣置

御鉄砲併諸道具詰帳

（本文）

一、三挺
但三匁五分（鉄砲の選別）

古留袋、馬皮朱塗。

胴乱、木綿くけ緒共ニ。

同裏入、右岡、木綿くけ緒共ニ古シ。

御鉄砲箱、棒共ニ。

鐵玉、但三匁五分。

合葉。

錐。

鉄手子。

駕矢（かけや）。

唐紙、せん共ニ。

鉄熊手、但三ツ。熊手柄武闘、石突有り。

御紋付提灯、溜塗金物、棒共ニ。

右入箱、系神（かけざむ）四間、結繩共。

一、一ツ 八疊 古覺、床八通り、表七疊、ヘリこん（君）。

右拾五同

右之酒體ニ受取申候以上

明和四年七月

高浜十兵衛

沢木十之進

熊沢十右衛門

小川専左衛門

山岡藤右衛門殿

目次

一、まえがき	七頁
二、本論	一頁
(1) 防人日記と種信の歌風	一頁
(2) 国学者種信としての渡島	一一頁
(3) 風土記的学風への事始め	一五頁
三、あとがき	一六頁

翻刻 「鹿島防人日記」 上巻 下巻 一八頁

一、まえがき

青柳種信が、木居宣長に名傳を率って入門したのは、種信二十四歳、寛政元年（一七八九）四月のことであった。爾来、江戸の藩邸に勤務し、藩務のかたわら国学の研鑽に努め、同好の士と親交することおよそ五年。寛政六年（一七九四）正月一八日、越町大火によつて藩邸類焼。旅装焼失の厄に遭つたが、さいわいにも、藩主黒田吉蔵から拝領物によつて、衣服その他を調えることができ、二月一九日には、無事に福岡城下に着き、しばらく龜原村の兄井本の家に寓した。

種信は、帰國後、やがて三月二八日、沖ノ島番所に徵錄（六石三人扶持）の足軽として勤番に赴いた。その勤番は、防人日記の四月末の記述に「韓人のようといふ事もなければ、防人等は神に仕ふる人の如く」云々とあるので、韓國船の見張りということが主任務であったように思われるが、参考のため、貝原益軒の『筑前国統風

土記』の拾遺（竹田定直校正）を引用してみよう。

鳴浦番所の事 寛永十七年江戸より対馬守、豊後守、加賀守、薩摩守、大炊守、堀頭頭の連判の奉書来る。其時の公命の旨に依て、此時より九州海辺鳴々番所を立、異船の來を伺戒む。因レ茲本州にも、姫島、西浦、相崎、大崎、岩屋五所に番をかまへ、定番の士を遣し、足軽をも副らる。右の外他の島にも定番を被置。於呂鳴、白鳴、奥ノ鳴にも、番船を遣し守らしむ。又鳴々定番の外、家老中老の家士を加番とす。且四月より六月迄三月の間、大身の士を毎月三度宛、海上に廻シ、鳴々被令（巡見）。正保二年西浦の番所を止て、女海島に移さる。又舟屋を立て、大船に番所を立候らる。脇浦、奥鳴にも番所を立らる。

これで見ると、きわめて厳重なもののように見えるが、種信勤番のころは、どのようなことであったのか、詳細は未詳である。種信の防人日記によつて想像するよりほかないものであるが、ここにつぎのような資料があるので、読者の一覧に供しよう（昭和三十九年一月一日、宗像神社刊行「宗像」第三七号「神の島番所の裝備」紹介者筑紫義）。

ここに紹介する記録は、かつて福岡市中浜町（現在、西区鳥飼）の故高野孤鹿氏の所蔵にかかるもので、明和四年（一七七七）七月に上下番交替の際に申送りした書類を、天保一二年（一八四二）五月に、佐野七平・古賀吉・野田憲八らが、勤番の心得資料として写し取ったものである。

الله يحيى العرش بروحه العطرة ويسعى في السموات السبع

秋の暮れのうきよちやうのあらわし

夏のちくわをうさぎ

萬國圖書大會書之此一函書了不甚喜之

あらわすみはくのものとて和小は命瑞風
吉柳らの高僧がたきに寺を訪ねまつての
一時の日記などとまゝ井の手川の閣の
お元よりうつしるをゆふれと書
さへ道文、ふ園の子をめんほんげく
せうじをもつてみづあらかさんまうる

松の風じらひ鳥

嘉水一早六種德。齡於歲之丁巳。歲次甲子。高錄家。

嘉永四年春正月小至丸壁後

貝清の考究文

仲
司
里
有

金言

此歌種德後半詩失傳力流鳴玉響凡音

防人日記

附人日記の青柳種信の宣政大年賀席、春日田家にて達三の歌謡講人歌一人より波龍子野・野猪子時・紀伊守・冲島仲綱・諸座由木木公頃等々、是故在高ち感觸、情事等々述べ、其数多種歌を之に譜して書付し、其樂甚矣。種信の筆也。

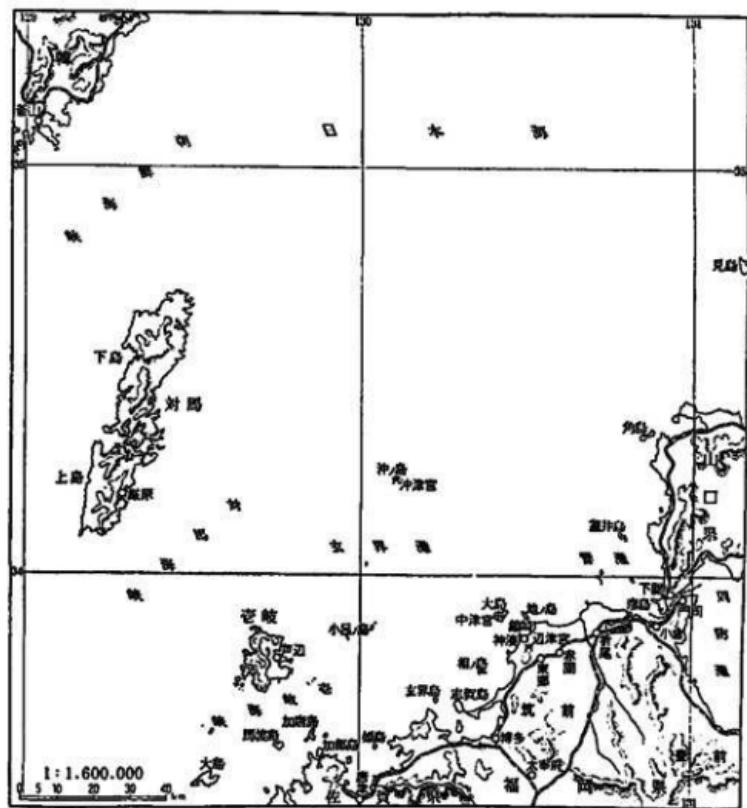
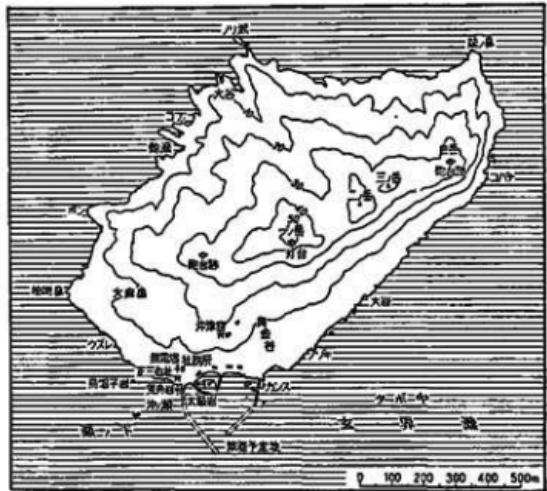
防人日記

卷之三

後者等の如きの二種を主張するが如き

あらゆる事に心をこめておはなを語り、
おのれの心はうれしくて、おまえ様の御子むすめの厚い恩
あつひを身に心づかうといふが、おまえの心はおまえの心

卷之三





小屋島

沖ノ島

御門柱

福岡市立歴史資料館研究報告 第三集

一九七九年三月

福岡藩の
国学者 青柳種信の研究(二)

大瀬島防人日記

筑紫

豊

執筆者紹介

筑紫 豊 福岡県、福岡市文化財保護審議会委員

三島 格 前福岡市立歴史資料館館長

福岡市立歴史資料館研究報告 第3集

1979年3月31日

編集・発行 福岡市立歴史資料館
福岡市中央区天神1丁目15番30号

印刷 福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂1丁目10番15号

